

明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向 (付 千葉医専留学生・辛亥革命紅十字隊関係史料)

見城 悌治

要旨

千葉大学医学部・薬学部の前身である千葉医学専門学校・千葉医科大学に在籍していた中国・韓国・台湾留学生について、年次別入学者の変遷、出身地、卒業・中退の別、卒業後の職業や実際の活動などについて整理し、その特色を示した。

とりわけ千葉医専・医科大を卒業した中国留学生が、日本の他の医学校出身者と比して、帰国後に母国の医学校教員になった者を非常に多く輩出し、草創期の近代中国医学教育の発展に大きな貢献をしたことを明らかにした。

また、1911年の辛亥革命時に、千葉医専留学生が赤十字隊を組織し、母国に赴いたことについて概述するとともに、関係史料のいくつかを翻刻掲載し、研究の便を図ることにも努めた。

はじめに

1911年10月、辛亥革命が起きた際、千葉医学専門学校（現 国立大学法人千葉大学医学部・薬学部）に在籍していた中国留学生たち40名余は、赤十字隊を組織して母国に戻り、戦闘で傷ついた人々の医療・看護活動に従事した。その顛末については、中国史研究者の小島淑男氏が既に明らかにし⁽¹⁾、また近年では、崔淑芬氏が日中文化交流史の観点から、この事績を取上げている⁽²⁾。この出来事自体は、近代東アジア政治史、文化交流史、教育史などに記載されても良い事項と思えるが、「辛亥革命と日本」という視点に限定しても、宮崎滔天等の革命支援協力の評価に比するべくもなく周知度は低い⁽³⁾。

一方、大学史という観点からは、千葉大学医学部・薬学部が既にまとめている「百年史」に、辛亥革命時の留学生の動向についての叙述は、ほとんど存在しない⁽⁴⁾。そもそも、明治以来の千葉大学医学部・薬学部における留学生受け入れ史の概要はまとめられていない状況にあるのである。

そこで、本稿は、明治後期から昭和初期の千葉医学専門学校（1901～1922年。以下、「医専」と略す）、千葉医科大学（1923～1949年。「医大」と略す）の留学生数の変遷、出身国別・地域別の変遷、卒業後の進路などをまとめ、明治～昭和初期の千葉医専・医科大における留学生の概要をトータルに捉えることを第一義的な課題とする⁽⁵⁾。その中で、千葉医専・医科大留学生（卒業生）と日本社会とが有した関係性、その歴史的役割などについて、いくつかの論点に分け、適宜の言及をおこなっていく。

なお、冒頭に記した辛亥革命での紅十字隊（赤十字隊）結成は重要な出来事であるが、小島氏の研究がかなりの部分を明らかにしているため、本稿では概述に留め、その一方で、

千葉医専の『校友会雑誌』に掲載されている関連史料ほかを、本稿末尾に翻刻収録し、研究の便に供することとした。

ところで、2008年5月現在、日本が受け入れている留学生数は、過去最高の123,829人となった。そして、その6割に当たる72,766人は中国籍の留学生⁽⁶⁾である。日本政府は、今後「留学生受入れ30万人」を目標として打ち出しているが、増加分の多くはやはり中国留学生であると予想される。

百年前の留日留学生もやはり中国人学生が圧倒的多数であった。日本社会が外国人（学生）を受け入れる時の問題は、百年前と比して、進歩改善された部分はあるが、その一方で、未解決の問題も少なくない⁽⁷⁾。現状の留学生受け入れ施策を考える際に、歴史を顧みる作業は、必ずしも迂遠ではなく、重要な過程であると筆者が考えていることも、本稿をまとめようとした理由の一つである。

なお、本稿のタイトルは、「千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」としたが、留学生の多数勢力で、また残された史料も豊富な中国（清国・中華民国）⁽⁸⁾留学生を中心に据え、朝鮮籍学生および台湾籍学生については、把握できた実数等を示す程度に留めることを最初にお断りしておきたい。

1 明治・大正期における中国留学生受け入れの概況

①日清～日露戦争期における清国留学生の急増

近代日本が受け入れた留学生は、1880年代の朝鮮の若者をその嚆矢とする⁽⁹⁾。しかしながら、日清戦争後の清朝政府が敗因を「日本が軍事力を初めとする西欧化に成功したため」と冷静に分析し、1896年に13名の留学生派遣を始めて以降は、一貫して、中国学生が留学生の中心的勢力になっていく。

日本への留学生派遣政策を主導したのは張之洞であったが、とりわけ彼が著した日本留学の勧めである『勸学篇』（1898年）は、「遊学の国に至りては、西洋は東洋[引用者註一日本のこと]に如かず。一、路近くして費を省き、多くを遺すべし。一、華を去ること近くして、考察し易し。一、東文[日本語]は中文に近く、通曉し易し。一、西書甚だ繁にして、凡そ西学の切要ならざるものは、東人[日本人]すでにこれを刪節して、これを酌改す。中・東の情勢風俗相近く、倣行し易く、事半ばにして、功倍すること、これに過ぐるものなし。もし自ら精を求め、備を求めんと欲すれば、再び西洋に赴いて何ぞ不可あらん（下巻、外編遊学第二）」のように、西洋に行かなくても、ごく近隣にあり、言葉も近い日本が、既に学問の必要な部分をまとめているので、日本へ留学することはきわめて効率が良い、という趣旨を述べ、大きな影響力を持った⁽¹⁰⁾。

わずか13名から始められた清国留学生派遣は、奨励策等に押され、漸次に数を増やしていくが、とりわけ、1905年9月の日露戦争終結は、日本が軍備を含む「近代化」に成功したことを清国側に確信させた。さらに同年清国が科举制度を廃止したため、立身出世のステップとして留学の価値が付与されたことも、留学生増を一層加速化させていく。

たとえば、1905年12月の新聞には、「清国留学生の本邦に来遊する者、近時日に多く、既に八千名の上に出づ。一様に留学生と泛称するも、その種類のはなはだ多般なるが如し。政府の派遣に出づるものあるべく、(略)発意志願より自己の費用を以て来りたるものあれば、また四五十の老成人もあり、これゆえにその来遊の目的事情に至りても、全く相同じきこと能はず」⁽¹¹⁾などの記事が載り、往時の盛況ぶりあるいは混乱ぶりを今に伝えている。

来日した留学生の多くは、その課程を一年か一年半で修了する「速成教育」⁽¹²⁾を受けていくのだが、教育体制が不十分な私立学校や暴利をむさぼろうとする下宿屋が次第に乱立し、社会問題となっていた。一方、清朝側は、日本への留学生が「革命派」に転じ、反清朝的行動を進めることへの懸念を深めていく。

②「留学生取締規則」から「五校特約」へ

文部省は、それらへの対処策として、1905年11月、省令19号「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規程」を出す。この規程は日本の学校や下宿屋を整備し、受け入れ態勢を整える要素と、清朝政府の要請を汲み、留学生が革命派に接触することを取り締まる要素の二側面を含んでいた。そのため在日留学生たちは、「これは『留学生取締規則』にはほかならない」と抗議活動をおこない、また憤激して帰国する者も少なくなかったため、一万人を越えていたと言われる留学生数は、一時的に減少を見る。

清朝政府にとって、いずれにしても留学生の質的向上は喫緊の課題であった。そして、留学を目指す若者の資格に制限を加えるため、1906年2月「選派遊学限制弁法」を通知した。それによれば、①高等・専門学校に入学を希望するものは、必ず中学校卒業以上のもの、かつ留学先国の言語に習熟すること。②速成科に入学を希望するものは、法政科および師範科のみとし、必ず中学・中文ともにすぐれ、年25歳以上で、学界・政界での実務経験ある者に限る、とされた⁽¹³⁾。

そもそも、当時の留日清国学生が在籍していたのは、先に述べた「速成教育」の私立学校がほとんどで、本格的な学問や技術を、大学などの高等専門教育で学んでいた留学生はわずか数パーセントに過ぎなかった。その主因は、日本の官立高等専門学校の収容定員枠自体が少なかったことに拠るが、入学を希望しながらも入れない留学希望者は2000名余りもいたとされる⁽¹⁴⁾。

そこで、清朝政府は、上記のような条件をクリアした優秀な学生の入学枠を広げることが日本との政治外交課題としていく。そして1907年、日中間で、日本の官立学校に清国留学生入学の特別枠を設けるいわゆる「五校特約」を締結する。これは、第一高等学校に65名の留学生を、東京高等師範学校に25名、東京高等工業学校40名、山口高等商業学校25名、そして、千葉医学専門学校には10名の枠を設け、総計で165名の留学生を、清国側(学生の出身省政府)の経費負担によって、1908年から15年間、受け入れることを定めるものであった⁽¹⁵⁾。そして、選抜された留学生には、毎年学費と教育費(補助費)として

一人 650 円の支給が約束された。この「五校特約」は辛亥革命により清朝政府が倒れた後も、1922 年まで継続され、日本の中国留学生受入れにきわめて大きな意味を持つ制度となっていく。

しかし「五校特約」などの制度こそ整備されたものの、中華民国成立以降は、日本への留学者よりも、欧米、とりわけアメリカへの留学者が大きな比重を占めていく。それには、様々な理由が挙げられるが、第一次世界大戦以降の日本政府による対中国政策が大きな影響を持ったことは否定できない。つまり、1915 年の「二十一ヶ条要求」、1919 年の「五四運動」など、日本の中国政策に対する中国側、とりわけ若者たちの批判・反発が大きかったことがその背景の一つをなす事は、改めて想起しておく必要がある。

以上、ここまで、明治末期から大正期の日本社会で、中国留学生が置かれた状況を一瞥してきた。他の事実関係や詳細は先行研究に譲り、本稿では千葉医専・医科大学の留学生をめぐる状況に絞って論じていきたい。

2 千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生受け入れ

①千葉大学医学部・薬学部の前史

千葉大学が国立の総合大学として誕生したのは、1949 年である。この時に生まれた学芸・工芸・園芸・医学・薬学の 5 学部は、それ以前に存在した高等教育機関をそれぞれ前身にしている。医学部は千葉町共立病院が設立された 1874 年を歴史的起源としており、同院は、76 年に公立千葉病院（医学教場付設）、また 82 年千葉県立千葉医学校及び附属病院へと移り変わる。それが 1887 年に官立に移管され、第一高等学校医学部となった。また 94 年の第一高等学校医学部を経て、1901 年に千葉医学専門学校、1923 年千葉医科大学となり、それが新制千葉大学に繋がる⁽¹⁶⁾。一方、薬学部の起源は、医学部の前史にあたる第一高等学校医学部に、薬学科が設置された 1890 年に求められている。以降は医学部の変遷史と重なり、第一高等学校医学部薬学科、千葉医学専門学校薬学科、千葉医科大学附属薬学専門部を経た上で、薬学部となった⁽¹⁷⁾。

このように千葉大学の医学部・薬学部はともに、百年を優に越える歴史を持つのであるが、留学生受け入れについて言えば、第一高等学校医学部時代の 1899 年に朝鮮学生が 1 名入学したのが、おそらくその嚆矢と考えられ、中国（清国）留学生については、1901 年が第 1 号である。この年、1901 年は官立千葉医学専門学校（以下、「医専」と適宜略す）へと移行していった年であるが、1907 年千葉医専が「五校特約」の一つに指定されたこともあり、それ以降、相当数の中国留学生を受け入れていく。

②20 世紀はじめの千葉町と千葉医専

ところで、1900 年代の千葉（町）という街はどのような環境であったのだろうか。そもそも江戸時代においては、海運や漁業の中心地・銚子や城下町であった佐倉などが町場として立派な賑わいを持っていたのに比して、千葉は小さな町場に過ぎなかった。1873 年に

県庁が置かれたものの、1912年段階でも、人口35,866名(戸数5500余り)に留まる田舎町で、いまだ千葉「町」であり⁽¹⁸⁾、千葉「市」に昇格するのは、しばらく先の1921年を待たなければならなかった。そもそも、医専・医科大の校域の西側3分の2は「千葉町」に属していたが、本部が置かれた校域の東端の行政区画は、「都村」であり、都村が千葉市に編入されたのは、1937年である。千葉医専・医科大は、全国でも珍しいであろう「村」を所在地とする官立大学だったのである。

1911年に出された『千葉街案内』(古川国三郎編、多田屋書店)には、「商業また真に殷賑の絶域に進まず。工業もいまだ振えりと言うべからず。町内繁華の大半は各種学生と軍人と官人によつて、これを保つのみ」という何とも淋しい紹介文が記載されている。1907年に千葉医専に入学した日本人学生も、「当時町内に散宿する者は医専の学生が主であり、その他は少数の官吏だけであつたので、千葉町は医学生および患者の町というような感じを示したのである」⁽¹⁹⁾と、『街案内』本と全く同様の回顧を残しており、「殷賑の絶域」には遠く及ばない状態であつた。

しかし、それだからこそ一方で「千葉医学専門学校は県立病院と相接して、猪鼻台の後ろに在る本校の存在は、ひとり千葉町繁盛の因を為しているのみならず、県としてもまた驕り(引用者注記一誇りの誤か)とするに足るべきものだ」⁽²⁰⁾という評価も強く打ち出されていたようである。

さらに千葉医専は、「第一高等学校医学部の後継」という経緯もあつたため、入学を目指す学生たちも多かった。往時を知る日本人は「医専は実地の臨床医師を多数に養成する。これは当時の国家としては絶対必要の事であり、全国に五の官立医専があり、第一高校医学部の後というわけで、千葉医専は全国の医専のうちでも、第一順位にあると云うような自負心があつた。それで入学試験の受験者数も千葉が断然第一位であつた」⁽²¹⁾とその高い人気を証言している。

したがって、1907年に「五校特約」が結ばれた際、唯一の医学系として、千葉医専が選ばれたのは頷けるところであつた。これら五校への入学について、1914年に第一高等学校予科に入った郭沫若が、「この五校はすべて日本の国立学校だつたし、受かれば官費ももらえるというので、留学生の競争的となつており、非常な難関でもあつた。八、九年受けてもまだ受からない者もいた。初めて行って、半年か一年のあいだに合格しようというのは、まったくあてのないことだつた」⁽²²⁾という回顧をしているが、日本人学生にとっても留学生にとっても、千葉医専に入学するのは困難であつたことが伺える。

③千葉医専・医科大学における留学生の特色

a) 作成した留学生名簿について

千葉医専(1901~1922年)、千葉医科大(1923~1949年。ただし本稿では45年までとしている)時代の留学生に焦点を絞った名簿等は整理されていない。そこで、本稿では、両校が各年の学校概要・諸データを公的にまとめていた『千葉医学専門学校一覧』および『千

明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向（見城）

番号	国別	医業	名前	入学年	革命	卒業年	出身地	勤務先など
1	K1		朴宗桓	1899年		1903年卒業	京城	日本赤十字社 → 京城府 弘仁堂医院
2	1		左起慶	1901年		1905年卒業	江蘇省	江蘇省常州起慶医院(開業)
3	K2		劉漢性	1901年		中退(1901)	京城	——
4	2		葉 瀾	1902年		中退(1902)	浙江省	——
5	3		劉 謙	1902年		中退(1905)	湖南省	——
6	4		徐 恒	1903年		中退(1905)	江南省	——
7	5		侯毓汶	1904年		1908年卒業	江蘇省	北洋軍医学校教授 → 南京陸軍医院院長 → 北京市・北京医院(院長;陸軍軍医) → 上海市・自新医院開業 → 中央防疫処科長 → 天津市衛生局科長 → 北京特別市政府衛生局長、中華医藥学会会長、北京医師会会長
8	6		王若儼	1904年		1908年修了	江蘇省	江西省南昌府医学専門学校(校長) → 江西省南昌慈惠病院(軍医) → 北京国会街(開業医)
9	7		王若儀	1904年		1908年修了	江蘇省	天津市河北黄緯路 陸軍軍医学校(教授)
10	K3		李基鉉	1904年		中退(1904)	京城	——
11	8	薬	汪與準	1904年		1907年卒業	浙江省	浙江省杭州医学専門学校(教官) → 南京軍政部兵工署技師
12	9	薬	屠 寛	1904年		中退(1904)	江蘇省	——
13	10		沈王楨	1905年		1909年卒業	浙江省	天津市河北黄緯路 陸軍軍医学校(教官) → 北平陸軍軍医学校 → 北平大学院医学院、→ 開業医
14	11		陸欽文	1905年		中退(1905)	江蘇省	——
15	12		張脩爵	1905年		中退(1909)	江蘇省	——
16	K4		申龍均	1905年		1912年卒業	全羅北道	咸鏡道咸興府(開業医) → 満州草梁鉄道病院
17	13	薬	彭樹滋	1905年		1908年修了	江蘇省	江蘇省蘇州医学専門学校(教授) → 中央軍官学校軍医院
18	14	薬	張脩敏	1905年		1909年卒業	江蘇省	北京市老君堂衛生材料廠(技師) → 北京陸軍軍医学校
19	15		吳嘉鈞	1906年		1910年卒業	安徽省	安徽省安慶城内陸軍病院(医員)
20	16		方 擎	1906年		1910年修了	福建省	北京陸軍部軍医処(軍医) → 北京首善医院
21	17		劉慶綬	1906年		1910年修了	江西省	天津市河北黄緯路 天津陸軍軍医学校(教授)
22	18		汪行恕	1906年		1910年修了	安徽省	死去
23	19		沙世傑	1906年		1911年修了	江蘇省	蘇州省立医学専門学校(勤務) → 江蘇省崇門北沙久鎮(開業医)
24	20		熊輔龍	1906年		1911年修了	江蘇省	江蘇省南通県南通公立医院(軍医) → 開業医
25	21		闕行健	1906年		1911年修了	江蘇省	江蘇省南通県南通医院(医員) → 皋城内徳輔医院
26	22		楊瑰南	1906年		中退(1907)	江蘇省	——
27	23		方声洞	1906年	▲	中退(1911)	福建省	1911年辛亥革命に関わり、死去
28	K5		康秉鈺	1906年		1910年卒業	平安北道	平壤府館後里 順天病院
29	K6		徐相鸞	1906年		中退(1906)	京城	——
30	24	薬	華 鴻	1906年		1909年修了	江蘇省	浙江省杭州医学専門学校(教授)
31	25	薬	薛宜琪	1906年		1909年修了	江蘇省	北京市 陸軍衛生材料廠(材料廠長) → 禁煙委員会科長
32	26		白雲章	1907年		1911年修了	直隸省	奉天城内鎮安上將軍行署(軍医) → 開業医
33	27		王 衡	1907年		1911年修了	直隸省	北京市石駙馬大街北京医院(医員) → 直隸省立医学専門学校 → 保定河北大学医学院教授
34	28		王琨芳	1907年	▲	1911年修了	湖北省	南京陸軍軍医院長一等軍医長 → 北京陸軍部(軍医) → 上海外灘中央銀行發行局
35	29		吳道益	1907年		1911年修了	浙江省	天津市河北黄緯路 陸軍軍医学校(教官) → 開業医
36	30		黄孟祥	1907年		1911年修了	湖南省	湖南省長沙府城内靖武上將軍行署 軍医課長 → 南京・康済医院
37	31		李鳴陽	1907年		中退(1909)	直隸省	——
38	32		錢樂真	1907年		中退(1909)	江蘇省	——
39	33		姚夢虞	1907年	●	中退(1912)	江蘇省	——
40	K7		吳相鉉	1907年		1912年卒業	京城	京城府長通橋通り長通病院(開業医)
41	K8		吳一純	1907年		中退(1907)	京城	——
42	34	薬	王麟書	1907年		1910年修了	江西省	天津市衛生化驗室技正
43	35	薬	谷鐘琦	1907年	▲	1911年修了	直隸省	天津市河北黄緯路 天津陸軍軍医学校(教授)
44	36	薬	謝祖恵	1907年		中退(1907)	江蘇省	——

明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向（見城）

45	37		李 定	1908年	●	1913年修了	浙江省	浙江省杭州医学校(教官)→ 浙江医学専門学校教授 → 浙江医薬専門学校教授 → 南洋医学院教務長 → 河北省立医学院解剖学教授
46	38		李垣昌	1908年	●	1913年修了	山西省	山西省大同府中学校転交(開業医)
47	39		陳任樑	1908年	●	1913年修了	広東省	広東省嘉応州松口葆公立高等学堂(開業医) → イン ドネシア・ジャカルタで開業医
48	40		吳垂良	1908年	●	1913年修了	江蘇省	江蘇省蘇州城内対門18王街85号 博愛医院(開業医)
49	41		丁求真	1908年	●	1914年修了	浙江省	浙江省天台県教育会(医員)→浙江省杭州 蒲場巷号 林武院 → ボルティモア在 → 浙江医薬専門学校 (校長) → 杭州・西湖肺癆療養院(開業)
50	42		田龍瑞	1908年	●	1914年修了	湖南省	湖南省長沙・康済医院(開業医)→上海市フランス租界 霞飛路 中江医院 → 長沙・秋明医院(開業)
51	43		朱 芾	1908年	●	1915年修了	江蘇省	上海予防花柳病療養院
52	44		許普及	1908年	●	1915年修了	江蘇省	蘇州省立医学専門学校(勤務) → 楊州・普済医院(開 業医)
53	45		黄 中	1908年		中退(1910)	湖南省	——
54	46		徐 寅	1908年	●	中退(1913)	湖北省	——
55	47		陸繞陽	1908年	●	中退(1913)	浙江省	——
56	48		王 穎	1908年		中退	福建省	——
57	K9		元憲常	1908年		1912年畢業	京城	京城府大安洞德済医院(開業医)
58	49	藥	徐希驥	1908年		1911年修了	浙江省	上海市 清和坊対街大生製薬戒烟社(在勤) → 上海 市 大生製薬公司
59	50	藥	喻培倫	1908年	▲	中退(1910)	四川省	1911年辛亥革命に関わり、死去
60	K10	藥	金戴健	1908年		中退(1908)	平安道	——
61	51		朱其輝	1909年	●	1914年修了	浙江省	浙江省紹興城内紅十字分会(医員) → 南京第八師軍 医長 → 北京医科大学内科主任(17～25年) → 河 北保定省立医学院教授 → 浙江医薬専門学校校長
62	52		何煥奎	1909年	●	1914年修了	江西省	江西省医学専門学校(教官) → 江西省南昌予章医院 (開業)
63	53		金子直	1909年	●	1914年修了	浙江省	北京市北京病院→北京西巷民巷博愛医院 → 南通医 科大学教務長 → 国際連盟中国秘書(1927年) → 高等警官学校法医学教授 → 国民政府衛生部科長
64	54		吳祥鳳	1909年	●	1915年修了	浙江省	アメリカ・ジョンボブキンス大学→北平大学医学院内科 教授 → 同大 医学院院長 → 北京大学教務長
65	55		毛汶泉	1909年	●	1915年修了	浙江省	上海・天一味母廠廠医
66	56		劉之綱	1909年	●	1915年修了	江西省	上海市フランス租界・中江医院
67	57		陳佩完	1909年	●	中退(1910)	広東省	——
68	58		趙録敏	1909年	●	中退(1917)	山東省	——
69	59		吳破天	1909年		中退	浙江省	——
70	K11		金鼎熙	1909年		1914年畢業	京城	京城府玉仁洞(開業医)
71	60	藥	蕭 登	1909年	●	1914年修了	湖南省	湖南省湖南督軍署軍医課 → 長沙・湖南公医院主任
72	61	藥	王震声	1909年		中退(1909)	浙江省	——
73	62		崔雲史	1910年	●	1915年畢業	広東省	広東省広東府南海県(開業医)→浙江省杭州西湖宝石 山衛戍病院 → 広東陸軍総医院軍医
74	63		謝 瑜	1910年	●	1915年修了	浙江省	浙江医薬専門学校
75	64		馮元亮	1910年	●	1916年修了	四川省	四川医專教授兼成都大学講師
76	65		李希賢	1910年	●	1916年修了	江蘇省	江蘇省南通 南通医院 → 南京にて開業医
77	66		官其駒	1910年		中退(1910)	広東省	——
78	67		張際康	1910年		中退(1911)	広東省	——
79	68		鄧以醵	1910年	●	中退(1912)	安徽省	清華大学美学教授
80	69		王錦雲	1910年	▲	中退(1913)	江蘇省	——
81	70		夏侯沛	1910年	▲	中退(1913)	四川省	——
82	71		恩 和	1910年	●	中退(1913)	蒙古	——
83	K12		金健植	1910年		1915年畢業	全羅南道	全羅南道康津郡内面西門里
84	72	藥	李潤鼎	1910年	●	1914年修了	山西省	山西省大同府大同県
85	73		李天錫	1911年	●	1916年畢業	広東省	英領シンガポール 日華医院 → 香港にて開業医
86	74		何浩先	1911年	●	1916年畢業	福建省	福建省福州倉前山 仁民医院(開業)
87	75		余繼敏	1911年	●	1916年畢業	浙江省	保定医学専門学校 → 浙江医薬専教授
88	76		吳公望	1911年		1916年修了	浙江省	浙江省嘉興県にて開業医
89	77		鄧純棣	1911年	●	1917年修了	四川省	四川省忠州石宝塞場→上海市フランス租界 華光医院
90	78		石君侠	1911年	●	1917年修了	安徽省	安徽省安慶惠民医院(開業)
91	79		黄 璜	1911年	●	1919年修了	福建省	福建省福州南台田瑞泉泰号

明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向（見城）

92	80		姚正一	1911年	●	中退(1913)	浙江省	——
93	81		崔文燦	1911年	●	中退(1915)	広東省	——
94	82		張邁郡	1911年	●	中退(1914)	浙江省	——
95	K13		朱栄善	1911年		1915年卒業	京城	京城府需昌洞（開業医）→朝鮮総督府医院
96	K14		張錫台	1911年		1915年卒業	京城	全南道済州城内 済一病院
97	K15		安東麟	1911年		1915年卒業	釜山	釜山府南浜町
98	83	薬	陳宏声	1911年	●	1915年修了	福建省	広東省原漂滇郡第四師司令部 → 浙江医薬専門学校教授 → 福建省政府参議兼秘書処第二科科长
99	84		鄧 初	1912年		1916年卒業	安徽省	北京内務部 → 山東大学教授兼校医
100	T1		林澄瑩	1912年		中退(1912)	台中県	——
101	K16		金淵玉	1912年		1916年卒業	平安南道	平安南道永柔郡西部面玉木里
102	K17		李泰熙	1912年		1917年卒業	平安南道	平安南道平原郡西海面蛇山里
103	K18	薬	韓英烈	1912年		中退(1912)	朝鮮	——
104	85		林卓立	1913年		1917年修了	福建省	福建省蕭田県城内文峰宮珍元号
105	86		鄧光濟	1913年		1917年修了	貴州省	千葉県立病院耳鼻咽喉科嘱託医員 → 貴州陸軍院院長 → 貴州省長公署軍医課課長 → 貴州省立医院(院長)、貴州大学医専科教授 → 貴陽県医師公会主
106	87		王孝綢	1913年		1918年卒業	福建省	牛込成城中学校裏 川口方
107	88		李復真	1913年		1918年修了	浙江省	江蘇省南通 南通医院 → 開業医
108	89		楊鶴慶	1913年		1918年修了	陝西省	陝西省陸軍病院 → 第十八陸軍医院院長
109	90		黄家政	1913年		1918年修了	江蘇省	江蘇省如皋公立医院院長、南通学院医科内科教授
110	91		丁鶴声	1913年		中退(1913)	浙江省	死亡
111	92		周成龍	1913年		中退(1916)	広東省	——
112	93		洪元晦	1913年		中退(1917)	広東省	——
113	94		陳賀虞	1913年		中退(1918)	直隸省	——
114	K19		李昌郁	1913年		1917年卒業	京城	京城府相思洞五統七戸、南満州安東県 泰誠堂医院
115	K20		朴治鐘	1913年		1917年卒業	平安北道	京城府履郷里 西京病院 → 平壤府紀笏病院
116	K21		李榮奎	1913年		中退(1915)	京畿道	——
117	95	薬	潘 経	1913年		1916年卒業	江西省	南京軍政部軍医司中科科长
118	96	薬	馮啓和	1913年		1916年卒業	広東省	広東省銀行発行科科长
119	97		繆 晃	1914年		1920年修了	浙江省	南京で開業医
120	98		朱章貴	1914年		1919年修了	浙江省	杭州医専教授
121	99		余道寛	1914年		1918年修了	広東省	不明
122	100		金宝善	1914年		1918年修了	浙江省	天津陸軍医学校教授 → 北京天壇中央防疫処 → 杭州市政府衛生局長 → 国民政府衛生部保健司長
123	101		賴履屨	1914年		1919年修了	福建省	福建省福州亭期郷永隆号
124	102		宋 森	1914年		中退(1915)	福建省	——
125	103		楊作梁	1914年		中退(1915)	広東省	——
126	104		万声鴻	1914年		中退(1916)	湖北省	——
127	K22		朱鐘勲	1914年		1920年卒業	咸鏡南道	東京 江東病院 → 京城府南大門通 朝鮮生命保險会社
128	K23		李圭南	1914年		1919年卒業	京城	京城府北部城北洞九統九戸
129	K24		孫永壘	1914年		1919年卒業	朝鮮	宮城県古川町 片倉病院
130	K25		盧鳳奎	1914年		1918年卒業	平安南道	朝鮮順川慈恵病院
131	K26		李潤戴	1914年		1918年卒業	京城	京城府薬園洞
132	K27		金 仙	1914年		中退(1914)	咸鏡南道	——
133	105	薬	史天山	1914年		1917年卒業	安徽省	安徽省桐城県甲種工業学校
134	106	薬	陳慶濂	1914年		1917年卒業	広東省	広東省城河南龍尾導潁川
135	107		金銘裕	1915年		1919年修了	江蘇省	江蘇省南通州南通医院
136	108		張光漢	1915年		1919年修了	福建省	莆田県立医院院長
137	109		劉榮敬	1915年		1919年修了	浙江省	寧波・仁済医院院長
138	110		陳能慮	1915年		1921年修了	湖南省	長沙・湖南公医院医師
139	111		李属春	1915年		1920年修了	江西省	上海・中江医院 → 南昌・章江医院(開業医) → 江西医専教授
140	112		員拜仁	1915年		1920年修了	陝西省	陝西省華陰県永寧堡
141	113		蹇先器	1915年		1920年修了	貴州省	北京医学専門学校教員 → 北京大学医学院教授(皮膚花柳科学)、付属医院院長
142	114		王慶恩	1915年		中退(1916)	山西省	——
143	115		趙右文	1915年		中退(1916)	不明	——
144	116		劉顯成	1915年		中退(1916)	浙江省	——

明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向（見城）

145	117		郭長新	1915年		中退(1917)	吉林省	——
146	118	薬	劉文超	1915年		1918年修了	陝西省	上海市亜林化学製薬廠 → 新華薬行
147	119		胡同穎	1916年		1920年畢業	浙江省	東京本郷 楊名館内
148	120		黄曾燮	1916年		1921年畢業	江蘇省	杭州・長生医院(開業)
149	121		章一心	1916年		1921年修了	浙江省	浙江省湯溪県
150	122		孟存心	1916年		1921年修了	陝西省	不明
151	123		高仁倬	1916年		中退(1919)	不明	——
152	T2		陳崑楠	1916年		中退(1917)	台湾	——
153	124		章達遊	1916年		中退(1917)	不明	——
154	125	薬	譚海夫	1916年		1919年畢業	広東省	第一集團軍軍医処材料科長
155	126	薬	向先果	1916年		1919年畢業	湖南省	長沙・民生薬房(開業)
156	127	薬	趙福琳	1916年		1919年畢業	陝西省	陝西陸軍医院司薬官
157	128		張聿介	1917年		1921年畢業	福建省	福州にて開業医
158	129		王友杰	1917年		1921年畢業	福建省	福州南台中洲兆培医院
159	130		劉清淑	1917年		1921年修了	江西省	江西医專教授兼附属医院院長
160	131		王 式	1917年		1922年畢業	浙江省	浙江省温州・大同医院(開業)
161	132		譚芳杓	1917年		1922年畢業	浙江省	浙江省新寧県
162	133		吳連雲	1917年		中退(1918)	不明	——
163	T3		林師古	1917年		中退(1917)	台湾	——
164	K28		韓在謙	1917年		中退(1917)	朝鮮	——
165	134	薬	魏文鉞	1917年		1920年畢業	湖南省	湖南公医院薬師
166	135	薬	朱国斌	1917年		1920年畢業	浙江省	浙江省義烏県中学校長
167	136	薬	俞 穎	1917年		中退(1919)	浙江省	——
168	137		孫遵行	1918年		1922年畢業	浙江省	蘇州医学専門学校 → 浙江省立医薬専門学校教授 → 北平大学医学院(眼科学)教授
169	138		郭琦元	1918年		1922年畢業	浙江省	上海東南医科大学(校長)
170	139		宋師濤	1918年		1922年畢業	浙江省	浙江省にて開業医
171	140		陳 倬	1918年		1922年畢業	浙江省	上海東南医学院
172	T4		王美木	1918年		1922年畢業	台湾	台湾南投庁沙保林
173	141		儲晋芳	1918年		1923年畢業	江蘇省	青島市立李村医院院長
174	142		梅 蓀	1918年		1922年修了	広東省	広東省台山県端分保
175	143		張溥恩	1918年		中退(1919)	不明	——
176	144	薬	張徳周	1918年		1921年畢業	浙江省	大阪市武田長兵衛商店
177	145	薬	区煒基	1918年		1921年畢業	広東省	広州・上池薬房主人
178	146	薬	陳渡生	1918年		1921年畢業	広東省	広東省広州府香山県古鶴郷
179	147	薬	蔡薪伝	1918年		1922年畢業	江蘇省	軍医署第八陸軍医院司薬官
180	148	薬	陳耀庭	1918年		中退(1920)	不明	——
181	149		郭致文	1919年		1923年畢業	浙江省	青島市立医院院長
182	150		林国祥	1919年		1923年畢業	浙江省	不明
183	151		畢鳳章	1919年		1923年畢業	江蘇省	上海静安寺道・開業医
184	152		高尚謙	1919年		1923年畢業	陝西省	不明
185	153		林鏡平	1919年		1923年畢業	浙江省	浙江省立医薬専門学校教授
186	154		李祖蔚	1919年		1923年畢業	福建省	東南医科大学、広西省立医学院外科教授
187	155		張 鎔	1919年		1927年畢業	浙江省	広西省立医学院教授
188	156		仲宗漢	1919年		中退(1922)	江蘇省	不明
189	157	薬	紀 緒	1919年		1922年畢業	江西省	北平陸軍軍医学校教官
190	158	薬	謝維楫	1919年		1922年畢業	山西省	山西綏靖署軍医処第二科長
191	159	薬	何俊才	1919年		1923年畢業	江蘇省	江蘇・保康薬房
192	160		趙師震	1920年		1924年畢業	江蘇省	上海国立東南大学医学院教務長 → 南通医学院 医科教授 → 青島市立医院内科主任
193	161		許 枏	1920年		1924年畢業	江蘇省	蘇州省立医院→開業医→南通医科大学
194	162		赫勝林	1920年		1924年畢業	不明	不明
195	163		田慶恩	1920年		1924年畢業	不明	不明
196	164		柯 青	1920年		1924年畢業	福建省	福建・伯棠医院
197	165		湯紀湖	1920年		1924年畢業	江蘇省	国民革命軍第一軍第一後方医院医務長 → 広 州第一衛戍病院医務長 → 上海東南大学医学 院医務長 → 同医学院教授
198	166		王 佶	1920年		1925年畢業	浙江省	千葉医科大外科副手 → 浙江省政府直轄広濟 医院外科主任 → 浙江省立医薬専門学校教授

明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向（見城）

199	167		蔡復元	1920年	中退(1921)	山東省	——
200	168		王者貴	1920年	中退(1920)	不明	——
201	169	薬	張斗南	1920年	1923年卒業	陝西省	不明
202	170	薬	丘秉銓	1920年	1923年卒業	江西省	武昌・民衆医院(開業)
203	171	薬	張家輔	1920年	1923年卒業	広西省	不明
204	172		旋 迪	1921年	1925年卒業	福建省	福州・復人医院眼科主任、江西省立医学専門学校教員
205	173		程世則	1921年	1925年卒業	浙江省	湖北第一陸軍医院軍医
206	174		董徳新	1921年	1925年卒業	浙江省	不明
207	175		張錫祺	1921年	1925年卒業	福建省	湖北第一陸軍医院軍医→上海東南医学院
208	176		李文瀾	1921年	1925年卒業	広東省	南京にて開業医
209	177		王景祺	1921年	1925年卒業	福建省	福建省防軍第二旅軍医処処長
210	178		袁愈琦	1921年	1925年卒業	貴州省	不明
211	179		周振治	1921年	1925年卒業	浙江省	不明
212	180		姚爾明	1921年	1925年卒業	直隸省	陝西省立医院外科処長
213	K29		方斗翰	1921年	中退(1921)	不明	——
214	181	薬	張大模	1921年	1924年卒業	湖南省	不明
215	182	薬	趙汝調	1921年	1924年卒業	江蘇省	上海・新亜薬廠廠長
216	183	薬	易 律	1921年	1925年卒業	江西省	広西軍医薬局主任
217	184	薬	張效宗	1921年	1925年卒業	山西省	陝西省防疫処研究科主任、上海東南医学院教授
				1925年	1929年卒業		
218	185	薬	王 鈞	1922年	1925年卒業	山西省	山西綏靖署衛生材料庫庫長
219	186	薬	黄裕綸	1922年	1925年卒業	広東省	広東陸軍総医院産婦科主任、南通大学医学校教授
				1925年	1929年卒業		
220	187	薬	吳琢成	1922年	1925年卒業	安徽省	死亡
				1925年	1929年卒業		
221	188	薬	江 澧	1922年	1925年卒業	江西省	江西省九江市立陶業学校教務長
222	189	薬	程 立	1922年	中退(1923)	浙江省	——
223	190	薬	陳世恩	1923年	中退(1924)	福建省	——
224	191	薬	龔積芝	1924年	中退(1925)	江蘇省	不明
225	T5		商滿生	1926年	中退	台湾	不明
226	192	薬	章志青	1926年	1929年卒業	浙江省	南通医学院、浙江省立医薬専門学校教授、
				1929年	1933年卒業		
227	193	薬	盧茂川	1927年	1930年卒業	不明	不明
228	194	薬	鄭泰行	1927年	1930年卒業	不明	不明
229	195		鄭万育	1928年	1932年卒業	江蘇省	広西省立医学院産婦科教授
230	196		劉詠昇	1928年	1933年卒業	江西省	不明
231	197		胡 烈	1928年	中退(1933)	福建省	——
232	198	薬	王 琨	1928年	1931年卒業	雲南省	広西省立医学院附属医院薬局主任、浙江民生製薬廠技師
233	199		邵 巖	1929年	1933年卒業	浙江省	浙江省立医薬専門学校教授、上海東南医学院教授
234	200	薬	蔡然捷	1929年	1932年卒業	不明	不明
235	201	薬	蔡則楷	1929年	1932年卒業	不明	不明
236	202	薬	徐伯鑒	1929年	1932年卒業	浙江省	浙江医薬専門学校教授、杭州中央航空学校教官
237	203		葉 曙	1930年	1934年卒業	湖北省	千葉医科大副手(病現学) → 上海東南医科大学
238	204		王 烈	1930年	1934年卒業	四川省	千葉医科大副手(皮膚・泌尿器科)
239	205	薬	林 光	1930年	1933年卒業	広東省	広州にて薬剤師
240	206	薬	李麟国	1930年	1933年卒業	不明	不明
241	207	薬	住 昂	1930年	1933年卒業	不明	不明
242	208		李天佑	1933年	1937年卒業	広東省	千葉医科大副手(眼科学)
243	209		孔禄郷	1933年	1937年卒業	浙江省	千葉医科大副手(法医学)
244	210		李 偉	1935年	1939年卒業	広東省	不明
245	211		林濬哲	1936年	1940年卒業	福建省	不明
246	212		張斟滋	1936年	1940年卒業	山東省	不明
247	213		楊 徳	1936年	中退	広東省	——
248	214	薬	洪水火	1936年	1939年卒業	不明	不明
249	215	薬	戴昌世	1936年	1939年卒業	浙江省	不明
250	216		吳寿典	1937年	1941年卒業	不明	不明
251	217		陳希声	1937年	1941年卒業	湖南省	不明

明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向（見城）

252	218		錢祖武	1937年		不明	浙江省	専攻生
253	219		韓宗琦	1937年		不明	浙江省	専攻生
254	220		方祝康	1937年		不明	浙江省	専攻生
255	221	薬	沈吉淳	1937年		1940年卒業	不明	不明
256	222		謝柱林	1938年		1942年卒業	不明	不明
257	223	薬	陳顯徳	1938年		1941年卒業	不明	不明
258	T6		鄭光輝	1939年		1943年卒業	台湾	不明
259	224	薬	翁耀雲	1939年		1942年卒業	不明	不明
260	225		柳歩青	1941年		1945年卒業	広東省	北京口腔医院名誉院長
261	T7	薬	廖繼思	1941年		1944年卒業	台湾	不明
262	226		王 瀛	1942年		1946年卒業	不明	不明
263	T8	薬	王橋棟	1942年		1945年卒業	台湾	不明
264	T9	薬	王占奎	1942年		1945年卒業	台湾	不明
265	227	薬	下澄新	1942年		1945年卒業	不明	不明
266	228		温士顯	1943年		1947年卒業	不明	不明

『千葉医科大学一覧』（毎年発行）の「在籍生」、「卒業生」欄、また『千葉医学専門学校校友会雑誌』誌上に折々掲載されていた「会員名簿」、「会員動静」を基本史料とし、当時、留学生を管轄していた外務省史料他から、千葉側史料にない人物も適宜補った。さらに、現在発行されている『千葉大学めのはな同窓会会員名簿』（医学部同窓会）、『千葉大学薬友会会員名簿』（薬学部同窓会）とも照らして、留学生名簿を〔表 1〕として作成した。

筆者が調べ得た範囲の 266 名を、①国・地域別（頭文字の K は韓国、T は台湾、無印は中国として、それぞれ通し番号を付けている）、②医薬の別、③名前、④入学年、⑤辛亥革命期の紅十字隊への参加の有無（●▲の違いは後に触れる）、⑥卒業年、⑦出身地、⑧卒業後の勤務先、の 8 項目に分けて一覧にしたものが、〔表 1〕である。

本表の順列については、最上位のカテゴリーに入学年を置き、次に医薬の別、その下に国別。国別の中では、卒業年次ごとに並べ、中退者は下位のカテゴリーに置いた。なお、千葉医専、医科大が正式な書類（文書）として作成したはずの『学校（大学）一覧』に氏名がないのに、中国側が作成した名簿や日華学会（外務省の依託を受け、留学生の諸支援をしていた）の書類などに名前が見えるものは本表に加えている。つまり、データによって、人物の把握が異なることが少なくないのだが、本稿においては、各種史料に看取しえたものを可能な限り最大数に拾い上げて、作表している⁽²³⁾。

「中退年」については、『一覧』などの在籍者名簿から名前が削除された年をもって「中退年」と見た。医専時代の『校友会雑誌』『一覧』などの史料は、入学卒業に際し、学生の名前をすべて挙げている場合が多いため、一人の学生の入学卒業年などの履歴を追跡するのは易く、必然的に「中退者」も確認できた。ところが、医科大学の『一覧』では、学生の情報が相対的に少なくなり、とりわけ 1930 年代末以降の学生データはほとんど確認できなくなるため、医学部・薬学部の『同窓会名簿』（最新版）を参考とし、在籍留学生を抽出した。しかし、これらは、ある学生が「卒業」した年は示し、「入学」した年までは触れていない。そのため、その時期の学生の入学年次は（逆算に基く）推定であることと、同期入学で卒業しなかった人がいたとしても現状では拾いあげるすべがない（在籍者数に参入できていない）ことを補足しておく。

b) 国・地域別、専門別の特徴

千葉医専・医科大の医学・薬学を学ぶために在学したことが今回確認できた 266 名の留学生中で、中国（清国、中華民国）籍の学生が 86%（228 名）と大多数を占めていた。朝鮮は 29 名で 11%、台湾はさらに少ない 3%（9 名）の在籍に留まった（〔表 2〕）。専門別では、医学専攻が 197 名（74%）、薬学専攻が 69 名（26%）に分れたが、入学者の卒業率については薬学が高率を示していた。

[表2] 千葉医専・千葉医科大における在籍留学生数(1899～1945年)

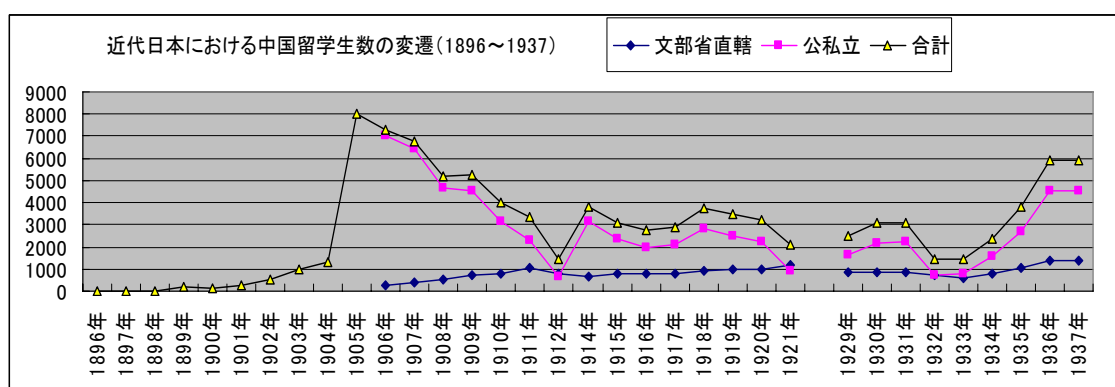
地域名	医薬別	入学者	卒業者	卒業率	中退者	中・卒不明
中国	医学	164	114	70%	45	3
	薬学	64	55	86%	9	0
	計	228	169	74%	54	3
台湾	医学	6	2	33%	3	1
	薬学	3	3	100%	0	0
	計	9	5	55%	3	1
朝鮮	医学	27	19	70%	8	0
	薬学	2	0	0%	2	0
	計	29	19	66%	10	4
計	医学計	197	135	69%	56	0
	薬学計	69	58	84%	11	4
	総計	266	195	73%	67	4

c) 年次別在籍者・入学者の特色

明治末から昭和初期までの全国中国人留学生数の変遷を、まず、[表3]によって一瞥しておきたい。

[表3] 近代日本における中国留学生数の変遷(1896～1937年)

出典：「外務省記録文書『在本邦清国留学生関係雑纂 第一、第二』（二見・佐藤「中国日本留学史関係統計」『国立教育研究所紀要』第94集（アジアにおける教育交流）1978年、および日華学会学報部編『中華民国満州国 留日学生名簿（第11版）』（1937年6月）から作成した。

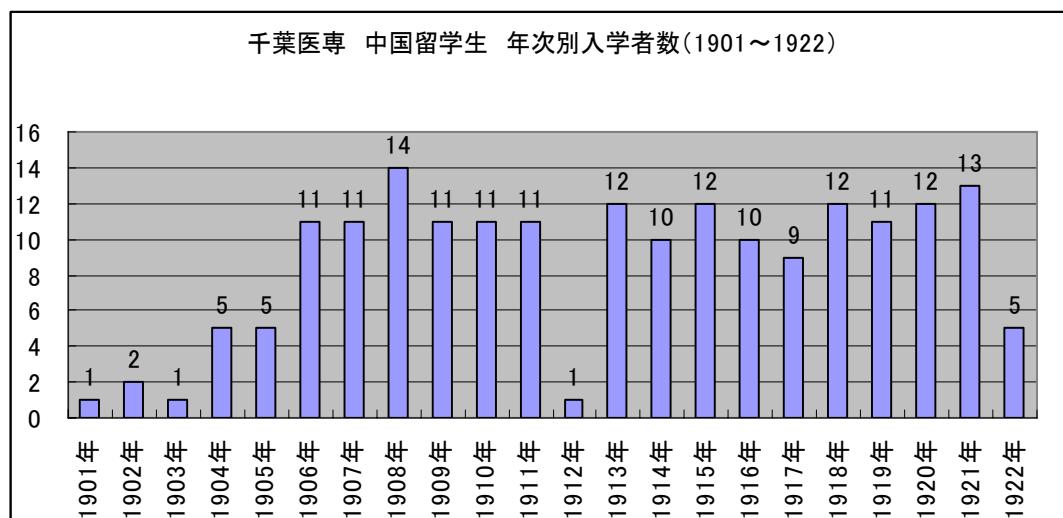


1896年に13名から始まった中国留学生の来日は、日露戦争期の1905年には8千名弱にまで増加する(06年には1.2万人、07年には1万人程度在留していたという説もある⁽²⁴⁾)。しかしながら、1905年のいわゆる「留学生取締規則」などの影響で減少。さらに、1912年には辛亥革命に伴う一時的な帰国により、在日留学生数は1500名程度にまで減った。中華

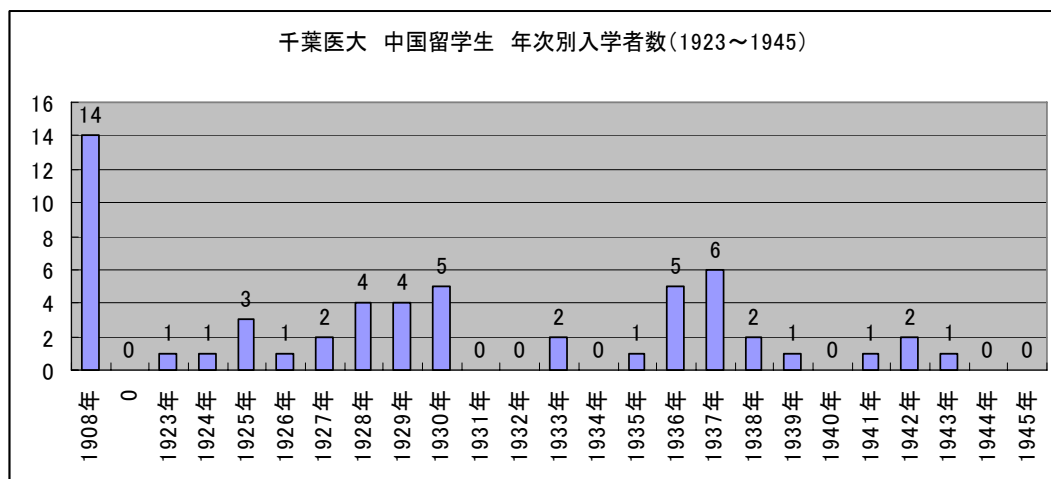
民国成立以降は、学生たちが再来日を果すなどして、数字はある程度持ち直す。しかしながら、1915年の「21ヶ条要求」に対する反日意識の高揚などから数字は低迷し、爾後3000名前後で推移していく。その数字をまた大きく減らしたのが、1931年9月の満州事変の勃発である。翌32年は、1400名程度に半減する。ところが、35年ころからまた人数が復しはじめ、盧溝橋事件が起こる37年ころには6000名あまりになっていた。

一方、千葉医専、医科大の留学生数は、どのように推移していったのか。筆者が作成した表1から、いくつかのデータを抽出し、再整理を試みた。まず、表4・5は医専と医科大に入学した中国人留学生数の推移である。

[表4] 千葉医学専門学校 中国留学生年次別入学者数(1901～22)



[表5] 千葉医科大学 中国留学生年次別入学者数(1923～45)



第一高等学校医学部時代の1899年に朝鮮学生1名が入学、千葉医専となった1901年に、清国留学生をさらに1名迎えたところに、現千葉大学の留学生受け入れ史が始まるのだが、

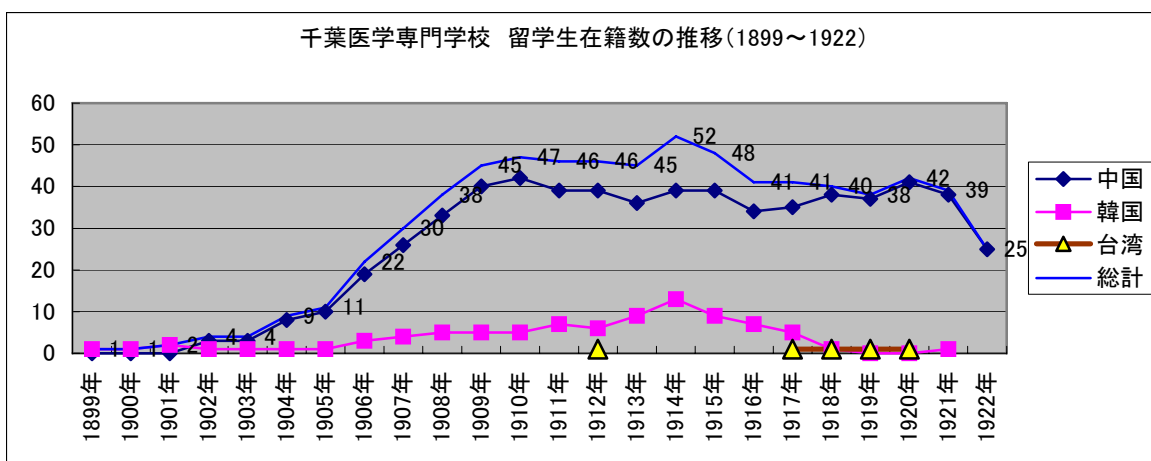
先に触れた全国的状況と同様に、留学生数は日露戦争後に急増していく。とりわけ、1908年から「五校特約（前述）」により、それ以降の15年間に毎年10名の中国留学生入学枠が用意されたことが、それをさらに後押しすることになった。

明治末期における千葉医専医学科一学年の在籍者（定員）数は、全体で100～110名程度、一方、薬学科は20名前後であった。留学生は定員外だったが、在籍生のそれぞれ一割程度（10名および2名程度）を「五校特約」時代においては受け入れていたことが分かる。

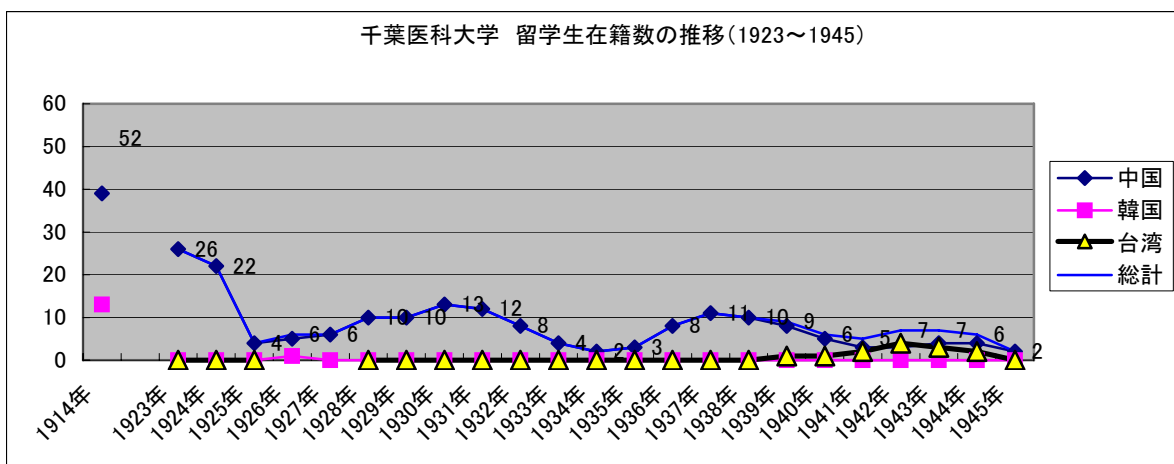
辛亥革命の影響を受けた1912年を除き、入学者は安定していたが、逆にその制度が廃止された23年以降は入学者が大幅に減っていく。それに加え、1923年の関東大震災のような自然災害、さらにまた満州事変（1931年）、日中戦争（1937年）のような中国への軍事的侵攻が中国学生を日本から一層遠ざけることになった。

表6・7は、朝鮮、台湾籍を含めた全留学生在籍者数の年次別変遷である。ここでも「五校特約」が1922年に廃止された影響が如実に見て取れる。このカテゴリーの学生が卒業した1925年の在籍生は、たった4名となり、最盛期の一割程度となってしまう。全国の文部

[表6]千葉医専 全留学生在籍者数の推移（1899～1922）



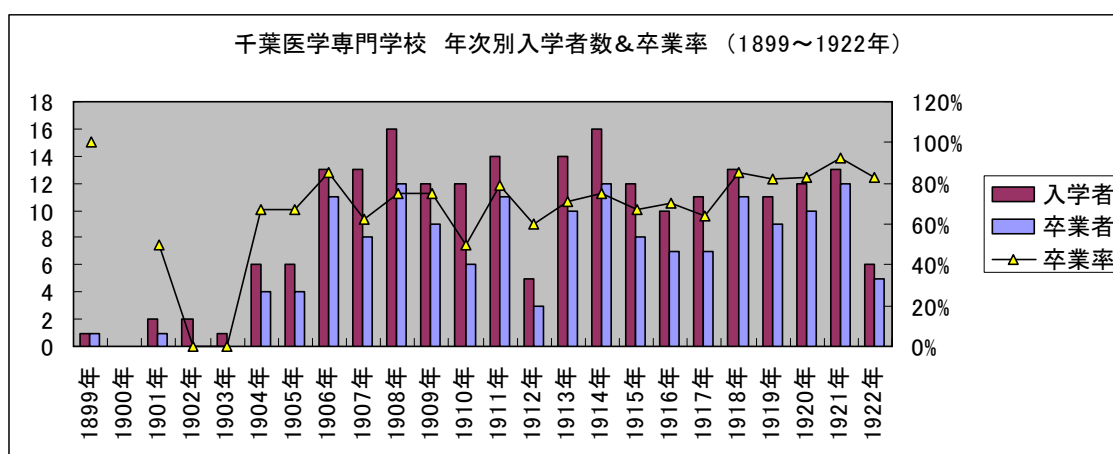
[表7] 千葉医科大学 留学生在籍者数の推移（1923～45）



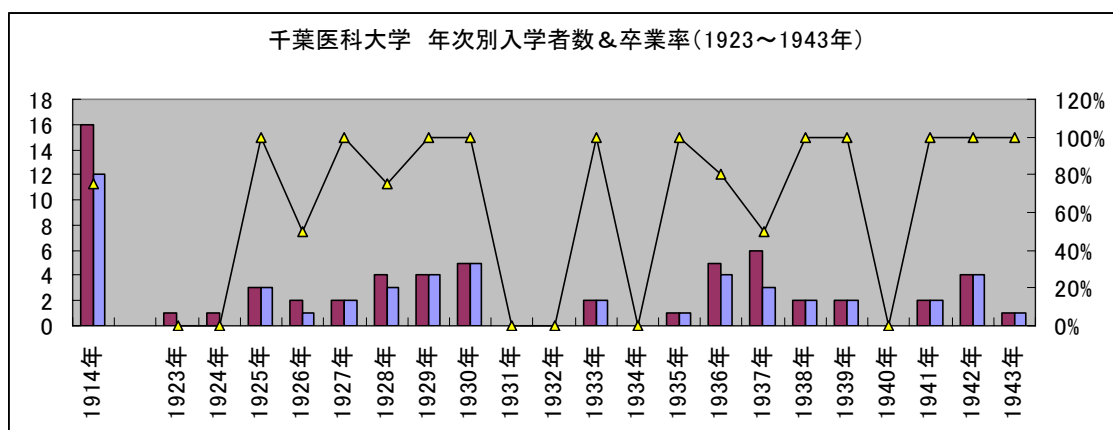
省直轄学校が受け入れていた中国留学生数自体は、1922 年もそれ以降も極端な減少を示していないことが表 3 で確認できるので、「五校特約」が千葉医専・医科大学の留学生受け入れに決定的な意味を持っていたことが明らかになる。

表 8・9 では、千葉医専、医科大学の年次別総入学者数および卒業率を表した。すでに表 4・5 で中国人留学生に絞った年次別入学者数を示したが、ここでは朝鮮、台湾籍の学生を加えた全体の傾向をまとめている。また、その学年に入学した学生が何名卒業できたかの数値も並べてグラフ化した。これによると、医専時代の卒業率はトータルで 73%、医

[表8] 千葉医専 年次別入学者数および卒業率（1899～1922）



[表9] 千葉医科大学 年次別入学者数および卒業率（1923～43 年）



科大時代の卒業率は 83%となる（²⁵）。日本の官立学校で学ぶべく中国から選抜された学生たちがほとんどであったため、順当に卒業を果していると見てよいだろう。

なお、最も卒業率が悪かったのは、1910 年入学組で、12 名中 6 名しか卒業を果せなかった。この原因は明白で、彼等が二年次の時、辛亥革命が勃発したからである。同じく辛亥革命に関わった人が多かった 1911 年入学組は 79%の卒業率を示し、平均値よりも高い。個々の事情もあるのだろうが、少なくとも 1910 年入学者が最も影響を被ったようである。

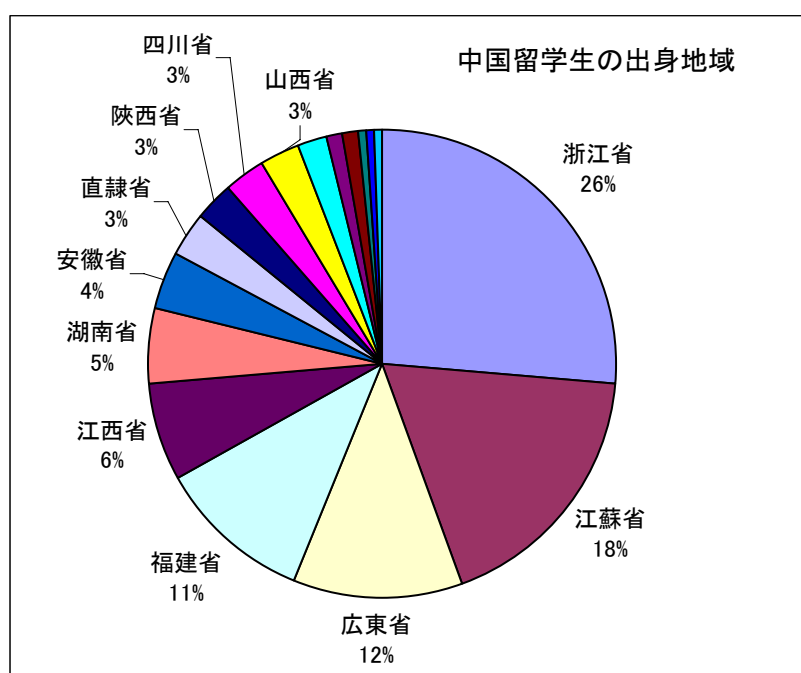
d) 各国留学生の出身地域の特徴

d-1) 中国留学生出身地域

千葉医専・医科大の中国留学生は、総計 228 名であるが、そのうち、出身省がわかっている学生は 185 名 (81%) である。そして、最も多く千葉医専に派遣していたのは、浙江省で全留学生の 4 名に 1 名が浙江出身であった。

[表 10] 中国留学生の出身地域

省名	人数	比率
浙江省	49	25%
江蘇省	33	18%
広東省	22	12%
福建省	20	11%
江西省	12	6%
湖南省	10	5%
安徽省	7	4%
直隸省	6	3%
陝西省	5	3%
四川省	5	3%
山西省	5	3%
湖北省	4	2%
山東省	2	1%
奉天省	2	1%
貴州省	1	1%
吉林省	1	1%
蒙古	1	1%
総計	185	100%



隣の江蘇省出身者も多く、両省で半分近くを占めた。また、広東や福建など南部出身者がそれに続き、北部から来ている学生は少数派であった。

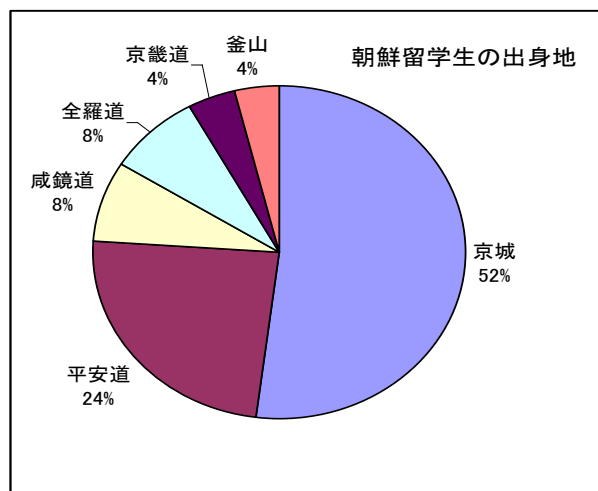
浙江省は日本への留学生派遣を早い時期から実施していた地域で、他専攻を含めても派遣数はトップクラスであった。魯迅・蒋介石・秋瑾など著名な人物も輩出している。なお、中国からの派遣学生は、清国あるいは中華民国政府そのものが経済的支援をしていたのではなく、各省が負担していた⁽²⁶⁾。

d-2) 朝鮮留学生出身地域

千葉に初めてやってきた留学生が、1899 年の朝鮮留学生であったことは既に述べたが、1945 年までに 29 名の朝鮮籍学生がいたことが確認できる。そのうち、出身地域が判明しているのは、25 名である。その半数は京城（現在のソウル。ここでは史料上の呼称をそのまま使う）出身で、平安道がそれに次いだ。総数が必ずしも多くないので、傾向や特色は論じにくいだが、中部から北部地域からの留学生が多かったようである。

〔表 11〕 朝鮮留学生の出身地域

地域名	人数	比率
京城	13	52%
平安道	6	24%
咸鏡道	2	8%
全羅道	2	8%
京畿道	1	4%
釜山	1	4%
総計	25	100%



d-3) 台湾留学生

台湾から入学した9名については、その出身地欄に「台湾」としか書かれていないケースがほとんどであるため、出身地域別の作表は行わない。

なおここでは、台湾人の日本留学をめぐる意識の一端を探ることのできる史料を一つ紹介し、台湾をめぐる分析が全くできなかった責めを多少補う形としたい。

1905年の科举制度廃止が、中国の若者たちの海外留学を促進した要因の一つであったことは先に触れた。必然的に、それは伝統的な知の世界に生きようとした知識人＝「読書人」たちの生き方を大きく変えていく。台湾は、すでにこの時、日本領に組み込まれていた訳だが、日本留学についての意味付けについては複雑な想いがあったと見る論がある。

「日本領台後は（略）官吏となることを目的とする読書人社会が、内地人官吏の配置によりて、全然その機能を封鎖されてしまい、一般良民社会を同等なる階級に墮落するやうになった事である。（略一日露戦争の勝利で台湾の清国復帰も容易に見込みがつかなくなった。）ここにおいて、読書人社会は、日本の治下において、日本流に社会的地位を獲得する外に道はないと考え、爾来その子弟をして日本の新教育を受けしむることに努むるようになった。東京留学生の増加したのも、その為めである。（略）しかるに、折角東京まで留学して学業を修めても、台湾に帰っては官吏になれない。何のための学問修業であるか、訳が分らなくなる。（略）また一方においては、支那から来た留学生は東京において、同様に学問して支那に帰れば、直に相当な、もしくは相当以上の高官に任ぜられる。本島人留学生は羨望に堪えない。と同時に台湾を顧みて、不平に堪えない」云々（27）。

この史料は、1920年代に台湾議会設置運動が隆盛した背景を探る点に眼目を置くのだが、大陸からの留学生と異なる煩悶を抱えていた台湾人の心理を窺わせるものがある。

e) 他大学と千葉医専・医科大の留学生受け入れの異同・特色

ここまで、全国の中国留学生受け入れの変遷、千葉医専・医科大における留学生受け入

れの変遷、留学生の出身地域別などの特色を一瞥してきた。本項では、全国における同校留学生受入れの位置づけをしておきたい。

〔表12〕は、文部省直轄学校に在籍した中国留学生数が1907年時と1914年時でどう変わったのかをまとめたものである。1907年における直轄学校在籍者は368名で、東京高等工業学校（現、東京工業大学）が73名で最も多く受け入れていた官立学校であった。そして、医科系では、18名が在籍していた千葉医専が他を大きく引き離して第一位になっていた⁽²⁸⁾。

〔表12〕 文部省直轄学校在籍中国留学生数の変遷(1907年→1914年)

(※印は1907年に創立されていなかった学校)

学校類別		学生数	
		計	学校名（学生数；1907年→1914年）
帝国大学		45 → 101	東京（35→45）、京都（10→20）、東北（※→33）、九州（※→3）
官公立大学		19 → 0	札幌農科（19→0）
高等師範学校		46 → 82	東京（44→72）、広島（2→4）、東京女子（※→6）
官 公 立 専 門 学 校	高 校	55 → 134	一高（31→62）、二高（5→14）、三高（13→13） 四高（0→5）、五高（3→11）、六高（0→11）、 七高（6→10）、八高（0→8）、
	高等農業	9 → 10	盛岡（9→0）、鹿児島（※→10）
	高等工業	98 → 198	秋田鉱山（※→4）、東京（73→140）、京都工芸（2→9）、 大阪（23→30）、名古屋（※→14）、熊本（※→1）
	高等商業	41 → 42	東京（41→27）、神戸（※→3）、山口（※→5）、 長崎（※→7）
	医学系	19 → 79	千葉（18→38）、金沢（※→1）、岡山（※→12）、 長崎（1→28）
	その他	28 → 1	東京聾啞（1）
計		368 → 666	

出典：外務省記録文書『在本邦清国留学生関係雑纂 第一、第二』（二見剛史・佐藤尚子「中国日本留学史関係統計」『国立教育研究所紀要』第94集（アジアにおける教育交流）1978年、から作成した。

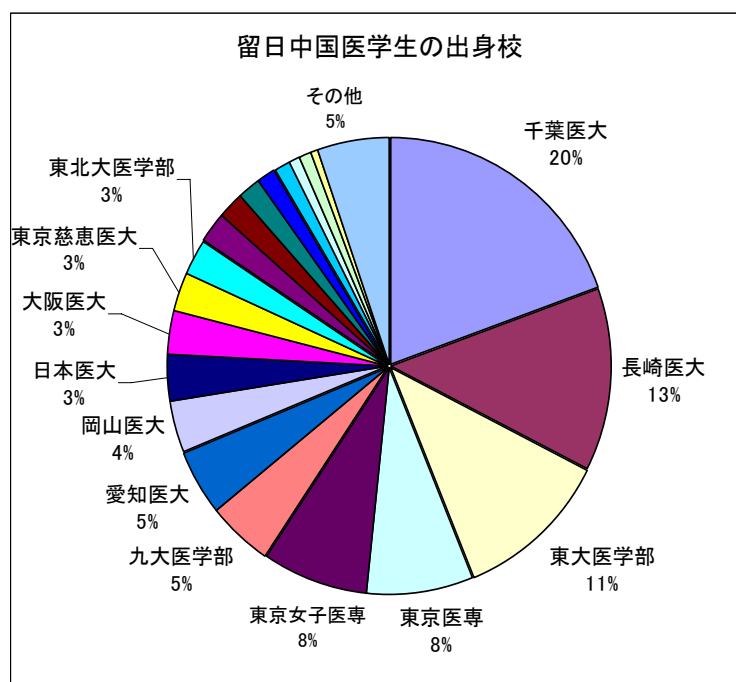
一方、1914年は666名となり、1.8倍もの増加を見た。千葉医専も38名（2.1倍）を受け入れている（〔表6〕によれば、14年が39名、13年が36名）。医専では、長崎医専が1名から28名に、岡山医専が0から12名に大きく数字を増やしている。なお、官立学校の中での第一位は07年に引き続き、東京高等工業で、官立学校留学生の全体の二割強が同校の学生であった。

医学系は教育・学問の性格上、他の教育分野に比べ収容能力に限りがあることは言うまでもないが、そうした意味からも、千葉医専が「五校特約」の十数年間、全国でトップの40名前後の医薬留学生を受け入れていたことは正しく認識されるべきであろう。

学生たちも在学中、千葉での学問吸収を積極的に行なっている。辛亥革命前に、留日清国学生たちが、雑誌を発刊し、革命思想の理論雑誌などを多く発刊したことは知られているが、千葉医専の学生も、1907年1月1日（旧暦）に、『医薬学報』と題する雑誌を「中国医薬学会」の名の下で発刊している⁽²⁹⁾。また、千葉医専薬学科の面々は、東京薬学専門学校、東京帝大薬学科等の留学生と1907年、「中華薬学会」を設立し、1917年4月に『中華薬学会雑誌』を発刊し、母国へも影響を与え、中国薬学の発展に寄与したという⁽³⁰⁾。

〔表 13〕 留日中国医学生出身校(1929 年頃まで) 出典：『同仁医学』 1930 年 9 月号

学校名	卒業生数	比率
千葉医大	154	20%
長崎医大	102	13%
東大医学部	90	11%
東京医専	62	8%
東京女子医専	62	8%
九大医学部	37	5%
愛知医大	37	5%
岡山医大	28	3%
日本医大	27	3%
大阪医大	24	3%
東京慈恵医大	21	3%
東北大学医学部	20	2%
京都府医大	18	2%
東京薬専	15	2%
帝国女子医専	13	2%
金沢医大	10	1%
京大医学部	9	1%
慶大医学部	7	1%
熊本医大	7	1%
富山薬専	5	1%
その他	41	5%
総計	789	



ところで、私立医大も含め、千葉医専・医科大を卒業した中国学生が、最も多かったことを示すデータがある。〔表 13〕は、同仁会（日本の医学界の一部が中国医学界との連携・協力支援を目指して設立した団体。後に詳述）が1930年夏にまとめたデータから作成したものだが、これによれば、千葉医専・医科大を卒業した中国留学生数は154名で他を引き離した第一位になっている。東大医学部出身者は第三位の90名に過ぎず、また魯迅が一時在籍していた東北大

医学部に至っては、20名しかいなかった。

さらに、1934年、外務省が中国駐在の各領事館等に依頼した「留学生帰国後の状況調査」への回答も千葉関係が大きな比率を占めていたことを知る史料となる。ここでは医学系の留学生総数は421名とされ、同仁会資料と数値を異にするが、出身校別では、千葉医大が86名で第一位、以下、長崎医大65名、東京医専38名、九州医大32名、東京女医専27名がトップ5であった。また、薬学系では、判明している帰国日本留学生65名のうち、千葉医大薬学科が27名、以下、東京薬専11名、長崎医大薬学科9名、東大医薬8名、富山薬専4名などなどで、千葉の薬学出身者がその4割を占めていた⁽³¹⁾。

これらのデータは、帰国留学生中に占める千葉医専・医科大卒業生の多さを明確に伝えてくれる。実際に彼らは中国の近代医科教育が草創される段階で教員等として活躍しているのだが、その実相については、「4」章で具体的に紹介していく。

3 辛亥革命と千葉医専留学生

①辛亥革命の勃発

1905年8月、東京で「中国革命同盟会」が結成された。また11月には、その機関誌『民報』が留日学生らによって東京で発行され、革命の気運を高める動きが明確になっていく。そして、遂に、1911年10月10日、湖北省武昌での武装蜂起を発端とし、翌年1月には孫文を臨時大総統とする中華民国臨時政府が南京に樹立されるに至った。

1911年秋段階で日本の学校に在籍していた中国留学生は、3300名余[表3]であったが、武昌蜂起以降、東京在住の留学生たちが集会計画を立て、千葉医専の学生たち等への働きかけも始めていく。千葉医専にはそのころ40名弱の中国学生が在籍していたが、1911年4月27日の広州蜂起に、医専学生であった方声洞【27】、喻培倫【59】(氏名の後に付ける【数字】は、[表1]の通し番号である。以下、同じ)が参加し、すでに落命しているなど(彼らは、革命の先陣を切った「黄花崗“七十二”烈士」と後に位置づけられる)など、革命への関心は高いものがあつた。

外務省外交文書に、千葉県知事告森良が10月27日付けで外務大臣内田康哉に宛てた「清国留学生ノ動静ニ関スル件報告」と題する千葉医専留学生をめぐる記録が残っている。

それによると、10月17日に千葉医専生の余継敏方を山口商業高等学校在籍の清国人・孫韜が訪問し、「革命軍は医官の不足及病院の設備なき為め、傷病兵の収容並に救療の途に窮せり。此条在日学生は赤十字軍を組織し、革命軍の爲め、大に勢援せざるべからず。本校在學生は全部この任に当たられたし」と説得勧誘した。これに対し、千葉医専の在學生たちは「集合凝議の結果、敢て不同意者なかりしも、目下同校在學生は二十七名[引用者一原史料ママ]にして、うち僅かに四年生四名、他は何れも一二年生なるを以て、未だ実務に通ぜされば、活動力乏しく、而已ならず、費用の出所なきより、ヤヤ々躊躇するに至れり」⁽³²⁾との反応であつたという。

この史料と同じ日付けとなる27日の『万朝報』には、「千葉医専留学生と革命」という

記事が掲載されている。そこに曰く、「千葉県医学専門学校留学生は、清国今回の動乱に就て、表面何気なき体を装ひ居れるも、事實は然らず。同校留学生三十九名中、蒙古人恩和を除く外、悉く広東四川其他南清の出身なるより、今回の動乱に就ては、革命軍に同情を寄せ、只管勝利成功を祈りつつある有様なる（略）しかし是等学生は北京政府より月謝及毎月三十三円宛を支給され居る関係より、頗る謹慎を表し居れり」云々。

この記事は、10月の武昌蜂起前に千葉医専学生の王錦雲【80】・夏侯沛【81】が帰国した事など⁽³³⁾など、留学生周辺が慌しくなってきたことを伝えるが、千葉に残った中国在学学生37名[表1]は「官費」を受給していたことなどもあり、革命への対処法について苦慮することになる。

なお、[表1]の「革命」欄で●を付したのは、千葉医専在学中国学生が作成した檄文（後述。【補足史料1】）に名前が見える学生37名である。また檄文作成前に帰国するなどしたが、当時在学しており、紅十字運動等に関わったことが『校友会雑誌』などで確認できた学生には▲を付している。とは言え、●▲は限定的な印に過ぎず、それ以外の人物が（とりわけ革命勃発前に帰国していた人たちが）革命に何らかの関わりを持ったことはもちろん想定される。たとえば、黄孟祥【36】が、現地に赴いた紅十字隊と連携して大きな役割を果たしたことは後に触れる。また、呉破天【69】は、10月23日付け『読売新聞』に「革命軍中の花」という見出しの下で、革命軍女性陣を率いるリーダーとして紹介されている⁽³⁴⁾ため、[表1]に組み込んだが、『一覧』など千葉医専側の史料からは在籍が確認できない。

②紅十字隊の結成

千葉医専の留学生たちは、何度も議論を重ねた結果、最終的に、革命軍のみの支援でなく、清朝軍、革命軍の隔てなく救護する「紅十字隊（赤十字隊）」を組織し、祖国に赴くことを決定する。10月30日付け『東京朝日新聞』には、千葉医専の留学生が協定した条項が示されている。①赤十字社の旨趣に基き、赤十字軍を組織し、官軍革命軍を問はず、負傷疾病病者を救護する事、②清国公使及び学生監督に稟請し、之が許可を受くる事、③赤十字軍組織の認可あれば、公使の手を経て、北京政府に電報する事、④赤十字軍に関する費用は、予て横浜神戸其他各地に在留する清商の義捐に仰ぐ事、⑤赤十字軍組織成れば、日本有名の医家を傭聘し、之を顧問とする事、⑥赤十字軍組織に関し、熊本仙台南岡山名古屋其他在留清国学生に向って檄を飛ばすこと、⑦赤十字軍成ると同時に檄文を各地に飛ばし、且之を新聞に掲載を請ひ、その旨趣を明かにする事、⑧上海に於て組織されたる赤十字社と連絡し、共に活動する事、云々。そして「中立の態度を固持して之に従事し、戦争終局するに至れば、直に日本に帰来し、専心医学を修め得業せんことを期すといふにあり」とも加えられていた。

こうした協議を経た上で作成されたと思われる「檄文」が外務省外交史料館に保管されている【補足史料1】。これが④⑥⑦に挙げられた各所に発せられたものと思われる。

また、⑤の「顧問医」について、千葉医専教授の三輪徳寛は、同校卒業生で日清日露に

従軍経験のある瀬川某に最初打診したが、うまく行かなかった⁽³⁵⁾。次に米国サンフランシスコの鉄道病院に勤務経験を持っていた別のOB鈴木寿賀治に諮ると、鈴木は、「突然の事で何の準備もありません。着のみ着の儘で出掛けて行くつもりです」と快諾し、ここに顧問医師も決定する⁽³⁶⁾。また、全国の医専留学生、神戸・横浜などの華僑に経済的援助を求め、東京の清国公使に直接交渉し、紅十字隊結成に関する本国政府からの許可、さらには千葉医専当局から一時帰国の許可を得るに至る。

千葉医専留学生を含む在日清国留学生のこうした動きは、連日新聞各紙で大きく報道された。そのためか、10月30日、紅十字軍の事務所としていた千葉医専留学生の下宿へ、「金縁眼鏡に洋服を着けた三六七歳の立派なる紳士風の男が訪ね来り、『自分は[引用者—住所実名があるが略す]今回の留学生諸君の赤十字軍は非常に賛成する所なれば、従軍を請わんとて来たり』。(略)『自分は医師にあらざるも、日露戦争の時、従軍して傷病兵救護には経験あれば、何卒従軍を承諾されよ。衛生材料等は自分の一手にて引き受けても宜し』と一時間半にわたり弁説をふるったという」⁽³⁷⁾。さらに、その翌日、「年頃五十くらいの筋肉逞しき大男来訪し、(略)以前清国に在留する事あり。今回、革命党の主将黎元洪の軍に投ぜんと、同時三十名を募集したれば、卿らの帰国する時、同行せずやと頼みしも、赤十字の眼中に、革命軍も官軍もなければ、とて断わりたるに、件の男は一時間許にして立去れり」⁽³⁸⁾という出来事が立て続けに起こっている。

今風に言えば、連日のメディア報道を通じた「劇場型」の進展が、人々の興味関心を掘り起こしていったのであろう。留学生の活動に対するこうした意外な支援の申し出等から、留学生の行動に共感を示す人士が少なかった様子を窺い知ることができるのである。

③千葉医専の教員・学生による支援活動

当時の千葉医専校長・荻生録造は、同校教授で県立千葉病院院長であった三輪徳寛等と連携を取り、帰国する留学生たちに、戦地における応急医療技術の講習会を開くことを決定した。11月1日から8日の間に実施され、そこでは、三輪が「創傷療法」を担当したほか、筒井八百珠「外科手術」、井上善次郎「内科学」、荻生録造「眼科学」、平野一貫「調剤術」、森理記「包帯および担架術」、岩槻「看護法」等の講義がもたれた⁽³⁹⁾。

ところで、当時の清国軍隊の衛生施設が未整備であったことを伝える証言が残る。清朝政府の衛生顧問として三年間武昌に招聘されていた日本の一等軍医某いわく、「清国の軍隊には全然衛生隊なしと云ふも不可なき有様(略)軍医の如きもほとんど日本と同数を備へあるも、その大半は漢方医にて、甚だしきは繃帯の巻き方も出血に対する応急手当も知らず、日本の即効紙の如き膏薬を貼って一時を凌ぐといふ有様なり」⁽⁴⁰⁾云々。正式な軍隊である清国軍がこの有様であれば、ましてや革命軍はさらに未整備の状態であっただろう。応急医療術を学んだ千葉医専などの留学生が重要な役目を果たしたことは、想像に難くない。

11月9日には、出発する清国留学生たちのために、日本人在校生650名と教職員が亥鼻キャンパスで壮行会を開いた。参加した日本人たちは、薬品や衛生資材を購入するための

資金として、一人 50 銭ずつの寄付も行なった上、壮行会が終わると、全員で千葉駅まで行進し、見送りをしている【補足史料 2】。

④ 中国大陸での救援活動

留学生たちは、その後、東京で他学校の仲間と準備を重ねた末、11 月 19 日に横浜を出港した。彼らが、上海に着いたのは、同月 26 日である。「日本より当地に来れる清国医学生男女百二十名は、陳任樑【47】及び日本人顧問の指揮の下に、清国赤十字社と漢口行の打合を為し居れり」（41）との報道の後、中国各地に派遣された、大阪高等学校と長崎医専の留学生たちは、鎮江に駐在し、千葉・東京・名古屋・京都・岡山などの紅十字隊は、甲乙二隊に分けられ、陳任樑を隊長とする甲隊は、湖南省長沙に、孫家樹（京都府立医専）を隊長とする乙隊は江蘇省浦口と江西省九江に赴いた（42）。

湖南省・長沙において、千葉医専出身の中国人医師や到着した紅十字隊メンバーと連携し、現地の医療救援活動に当たった日本人医師（同仁会派遣医師・全徳岩蔵）が、現地の状況を東京の同仁会本部に報告した書簡がある。少し長くなるが、引用したい。

「(4 年間江西鉄道局に勤めた全徳は、長沙日本人会の招聘で、1911 年 10 月に長沙に) 赴任開院候と同時に、今回の事変に際会し、(略) 湖南紅十字会組織の交渉有之、助手五十名の速成講習囑託被致、十二月第一回講習を結了致し申候。

折柄千葉医学士・黄孟祥君【36】の訪問を受け、衛戍病院組織の援助を被為依頼、十二月四日着手。一週間内に収容負傷兵百名、外来患者百二三十名、当時者としては黄君と迂生の二名のみ。他は速成講習生十四五名にて、必死義務的に傷病兵治療に従事致居候。

何分突然の事とて、器械薬品の供給意の如くならず、一時は大いに狼狽致候得共、去月[十二月]末日、日本留学生赤十字団の来沙するあり。団員中、千葉四年生呉重良【48】、二年生田[瑞龍]及何[煥奎]の三名【50、62】は、黄君の親友にも有之、かつ現状に同情を寄せ来て応援するあり。

旁々目下大に秩序も相立ち、些か余暇を得て、自宅院務に従事罷在候。(略) 何分、当省には外国医学校出としては、黄君の外一人もなき事とて、都督部内に於ける信用、益々順調にて、野戦病院組織および医科大学設備員大いに活動致居候」云々（43）。

全徳の書簡からは、彼と黄孟祥との連携【補足史料 3】、それを後からサポートした千葉医専紅十字隊の活動が、現地で高い評価を得たことを伝えてくれる。蕭登【71】および鈴木寿賀治が、荻生校長に宛て、現地の概況を説明した書簡も残る【補足史料 4・5】。

さて、湖南省以外の地でも留学生による紅十字隊は活躍し、湖北・江西・安徽・江蘇省などで救護活動に当たったと言われる。千葉医専紅十字隊の中心人物の一人であった陳任樑（甲隊隊長）は、のち、清朝を打倒するために組織された広東北伐軍の軍医部長に就いていることが明らかになっている（44）。丁求真【49】については、「第一次革命の際、中国紅十字会を組織し、これに従う。籌安会発生後、浙江独立を謀る（原文中国語）」（45）という「経歴」を記す文章が残っている。

さらに、また革命の中心人物の一人であった黄興が、千葉医専関係者に謝意を示したとも読める史料も残っている。「南京陸軍軍医院長一等軍医長」に就いていた王琨芳【34】が、母校の荻生校長に宛てた手紙（1912年3月16日付け）がそれで、荻生校長たちから「御深厚なる御教示に預り候事は、陸軍部総長、黄閣下[引用者—黄興]にも伝言致し候処、深く感謝致居候」と記されていた【補足史料6】。

中国国内が落ち着いた1912年4月ころから、留学生は漸次キャンパスに戻りはじめ、ほとんどの学生は復学を果たした。そして、出発からちょうど一年後の1912年11月9日に、亥鼻キャンパスの一角に、記念碑を建設している【補足史料7】（碑文全文については【補足史料8】）。

この建碑後、まもなく、荻生録造校長が「日支関係今日のごとき日に当り、ことに多数の留学生を有する本校に於て、支那語研究を始むるは、大に時期に適せるにあらずや」と提起したのを受け、同月27日に「千葉医学専門学校支那語研究会」の発会式が行われていることも紹介しておきたい【補足史料9】⁽⁴⁶⁾。

さらにその一年あまり後の1913年夏における千葉医専学生の動向を、千葉県知事・池松時和が、内務大臣・原敬に知らせた文書（1913年7月24日付け）が残っている。復学した留学生と革命派との関係について、当局側の認識が窺える史料である。

「支那留学生に関する件

支那擾乱に関する千葉医学専門学校在学生の行動に付て、(略) なおその後の行動より内査報するに、先に同校を卒業し、現に南軍所属の軍医部長にして江蘇省に在る王若巖より、このほど在校幹事何熾奎に宛て、個人として此際帰国すべき旨通信し来れり。爰に於て、在学生等協議の結果、何幹事代表者となり、夏季休暇を利用し、その実況視察の爲め、数日前帰国致候。而して、現留学生三十二名中南軍所属は三十名にして、北軍は僅かに二名の由なり。目下彼等は極めて静穏なるも、何幹事より帰国を促し来れるに於ては、一同帰国するやも測り難き状況に有之候。」⁽⁴⁷⁾

当時の千葉医専在籍中国学生は、ほとんどが「南軍」支持派であった（と認識されていた）こと、先輩の王若巖【8】から「帰国すべき」と命があり、代表の何（名前は、煥奎【62】が正しい）が帰国し、情勢を探ったことが明らかになる。

当局者は千葉医専留学生が「一同帰国する」ことを懸念したが、それは杞憂に終わる。何を初めとする多くの在籍生たちは中途退学ではなく、きちんと卒業した上で戻る道を選んだ。そして、新国家の建設に医学校教員などとして大いに貢献することになるのだが、その具体相を以下で紹介していきたい。

4 千葉医専・医科大の卒業留学生の活躍

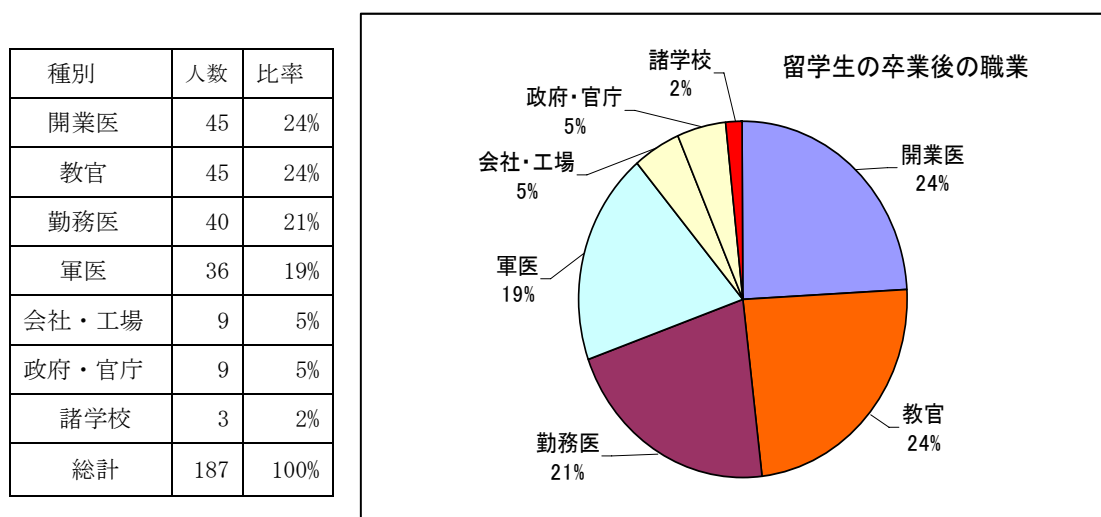
①留学生卒業生および一般卒業生の職業概況

1911年の辛亥革命に当り、医専留学生たちが紅十字隊活動に貢献従事したことを概述したが、これらはある程度知られている事実である。本章では、これまでほとんどまとめら

れていなかった千葉医専・医大留学生の帰国後の活躍についての整理を行なっていく。

まず、[表 1]に挙げた千葉医専・医科大学卒業後の職業を便宜的に 7 種類に分け、[表 14]にまとめた。この分類では、①ある卒業生がどのような形（職業）で、帰国後に社会貢献を果たしたのかを見ると目的を置いたため、一人の人物が、はじめ「勤務医」に就き、「医学校教官」を経た上で「開業医」となった場合は、それぞれ「1」とカウントしている。つまり、この表の総数 187 名は「延べ数」であり、実数ではない。②職業変遷（履歴）の順序はおおむね典拠史料の年次に従ったが、本人の申告によるものではないので、一部順逆になっている可能性がある、③留学生の卒業後の職業全体を把握するために、朝鮮・台湾の卒業生も含み、中国留学生に限定したデータでない、等の点には留意されたい。

[表 14] 千葉医専・医科大学留学生の卒業後の職業



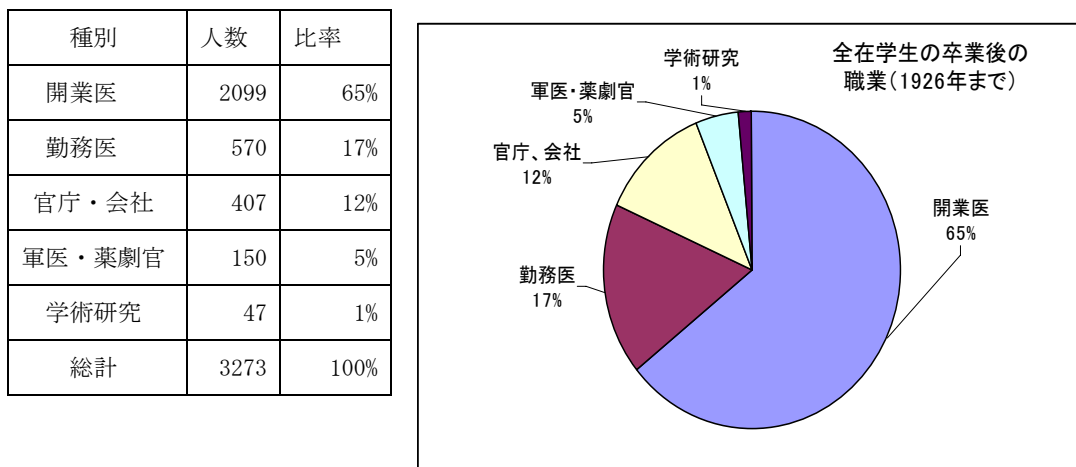
さて、このまとめによれば、千葉医専・医科大留学生の卒業後の仕事は、開業医と医学校教官がそれぞれ 4 分の 1 ずつを占め、勤務医が僅差でそれに続いている。軍医も多かった。しかし、朝鮮・台湾出身者で、軍医および医学校教官になった人はいない。一方、朝鮮出身者の開業医と勤務医はそれぞれ 8 名いるので、この数を減じ（総計を 171 名とし）、中国卒業生間における百分比として改めて算出すると、医学校教官の比率が 26%、開業医が 22%、軍医が 21%、勤務医が 19%になる。つまり、中国留学生に限定すると、帰国後、母国の医学校教官として、若い学生たちの教育に当たった人がもっとも多かったことが確認できるのである。

留学生卒業後の職業の特色を明確にするため、第一高等中学校医学部時代から千葉医専、医科大学を通じた全卒業生（1926 年まで）の職業と対比してみたい。[表 15]の職業分類は、データの典拠である『千葉医科大学一覧』（1926 年版）に従ったが、留学生で最も多かった範疇である「医学校教官」に就いた日本人たちがどこに分類されているのかは不明である。「学術研究」ではないかとも予想されるが、47 名だとやや少ないようにも思える。仮にそうであったとすると、中国人については、筆者の調査で（最大で）45 名余りは居た計算に

なるので、そもそも留学生の職業は反映されていない可能性が高くなる。

いずれにしても、千葉医専・医科大学卒業生の実に3分の2は開業医になっていたことが分かる。勤務医の数を合すると全体の80%にのぼり、同校が日本各地で、地域医療に従事する医師を着実に養成していたことが改めて認識できるのである。

[表 15]全在学生の卒業後の職業 (出典:『千葉医科大学一覧』1926年)



②中国で医学校・医科大学関係教官になった卒業生たち

a) 浙江省立医学(医薬)専門学校

中国近代史研究者の小島淑男氏によれば、中国における医学は漢方の伝統と勢力が大きかったため、西洋式の医学校は民国期になってから創設されたものがほとんどであった。その先陣の一つが、杭州に設立された浙江省立医学専門学校である(48)。同校は当時浙江省での西洋医学が英国人宣教師の経営する学校に牛耳られていたことに反発した日本留学組(金沢医専出身者が中心)が浙江省の公費で1912年6月に設立したという経緯を持つ(1913年には薬学科も増設され、浙江医学専門学校から医薬専門学校へと改名した)。

この学校には相当数の千葉医専出身者が教官として勤めていた。浙江省出身の留日帰国学生についてまとめた呂順長氏の研究によれば、1935年前後までの浙江省立医薬専門学校に、次の千葉医専出身者がいたことが、簡単な略歴とともに紹介されている(49)。

李定【45】。1905年、日本に私費留学。清華学校を経て、1908年9月、浙江省の官費で千葉医専に入学。帰国後、1923年浙江省立医薬専門学校の三代校長に就く。

(なお、別の史料(50)から判明した李の略歴を補足しておく。その後、浙江省立伝染病院院長、浙江省長公署高等衛生顧問。浙江省政府から、医学教育視察のため、欧州へ派遣され、帰国後の1936年、河北省立医学院解剖学主任教授となる、云々。)

余繼敏【87】。1909年、中央大学予科に入り、その後、浙江省官費で千葉医専に入学。帰国後、浙江省立医薬専門学校の教員を務め、1924年には学校の教務を司どるようになった。

丁求真【49】。1905年、日本に私費留学。宏文学院を経て、1908年浙江省の官費で千葉医専に入学。1914年卒業して帰国。1915年、人と資金を集め、赤華女子学校を創設。その後、浙江医学専門学校の教員になったが、1917年からアメリカ留学。1926年浙江省立医薬専門

学校校長に就く。杭州では武林病院も創設している。

朱其輝【61】。1908年私費で日本に留学。1909年、浙江省の官費で千葉医専に入学。1927年、丁求真が辞職した後、校長に就く。

王佶【198】。1908年私費で日本に留学。1909年、浙江省の官費で千葉医専に入学。1935年、校長に就任。

呂氏は、以上のように5名の名前を挙げているが、外務省外交文書「昭和10年4月 浙江省立医薬専門学校教職員ニ関シ報告」⁽⁵¹⁾は、驚くべき事実を伝える。すなわち、これによれば、1935年3月現在、同校の「医科」には24名の教授（校長1名、専門担当17名、教養担当6名）がいたが、そのうち実に専門担当者の過半を越える10名もが千葉医専・医科大出身者によって占められていた。「薬科」でも15名（専門担当8名、教養担当7名）中2名が千葉医専卒業生であった。

その面々を紹介しよう。まず「医科」では、校長が王佶【198】。「解剖」は朱仲青（筆者が作成した[表1]から、この名前は確認できない。朱其輝【61】同一人物か）。「生化・生理」余繼敏【87】、「眼科・日支」孫遵行【168】、「薬物」章志青【226】、「胎生・局解」黄曾燮【148】、「診断」張輔襄（名簿からは確認できない。張家輔【203】か）、「外科・整形外科」林鏡平【185】、「耳鼻咽喉」邵岩（巖）【233】、「公共衛生」丁求真【49】。以上、10名である。

「薬科」では、「生薬」を徐伯璽【236】が担当していたほか、医科の眼科教授であった孫遵行が、「日本語」の教授もしていた。

この「報告」は杭州在の日本領事代理・松村雄蔵が広田弘毅外務大臣に1935年3月29日付けで送ったものであるが、そこには「当地浙江省立医薬専門学校に於ては、最近ドイツ留学出身の校長辞任し、其の後釜として、我千葉医大出身王佶就任したるが、これと共に、教授連に異動あり。結局別紙名簿の通り、本邦留学生出身者圧倒的大多数を占むるに至れり。既報の通り、今回同校が久振りに学生の渡日見学旅行を行うに至りたるは、円為替安、対日好転等にも原由するも、前述の如く本邦出身教職員勢力の挽回せることも見逃すべからざる現象なり」と、日本（千葉）留学組の勢力伸張が大きく評価されていた。

日中関係がきわめて行き先不透明な1935年という時期に、医科の教授総数24名中、日本の医科大学卒業生や日本訪問経験者が19名、薬科15名中では8名が日本関係者であることに、外務省サイドが意を強くしたのは、頷けるところである。

なお、1909年前後の「杭州医学校」（おそらく浙江省立医学専門学校と同一か）には、千葉医専出身の島田伝之助が教員として在籍していたことが史料に残っている⁽⁵²⁾。

b) 北京医学専門学校および北京（北平）大学医学院

北京医学専門学校も、1912年の創立である。初代校長には、浙江医学専門学校の設立にも尽力した湯爾和（金沢医専卒）が就いたが、千葉医専関係者も多く、勤務した。

1909年に卒業した方肇【20】は、母国で『医薬学報』主筆を務めていたが、北京医学専門学校教授となった。また北京政府陸軍部軍医長、北京首善医院院長なども歴任した⁽⁵³⁾

1914年に卒業した朱其輝【61】は、ドイツのベルリン医科大学でも学び、のち浙江省立医薬専門学校長に就く（この点、既述）。さらに浙江大学の衛生学教授を経て、1936年北平大学医学院内科学教授兼附属医院長にも就いた（⁵⁴）。

呉祥鳳【64】は1915年に卒業した後、ドイツとアメリカ（ジョンボスキンス大学）へ留学を重ね、帰国。北平大学医学院内科主任教授を経て、1933年同医学院院長となり、北京大学教務長も務めた（⁵⁵）。

蹇先器【141】は1920年に卒業した後、北京医学専門学校教員を経て、1928年北平大学医学院教授、さらに北京大学医学院教授に就いている（⁵⁶）。

なお、1936年8月に北平大学医学院を訪問した東京帝大医学部長・永井潜の視察談によれば、訪問時の正教授21名のうち10名が元日本留学生で、千葉と九州出身者が4名ずつ。岡山と京都が1名ずつであったという（⁵⁷）。

c) 江蘇(蘇州)公立医学専門学校および上海東南医学院(東南医科大学)

1912年に設立された江蘇公立医学専門学校は、蘇州にあったため、蘇州医学専門学校とも呼ばれており、彭樹滋【17】、沙世傑【23】、許普及【52】、孫遵行【168】の千葉医専出身者が教授を務めていたが、1924年に閉校されてしまう。それを惜しんだ千葉医専卒業生の郭琦元【169】、李祖蔚【186】、湯紀湖（蠡舟）【197】、葉曙【237】らが、1926年5月、同校を上海の地で再建し、私立東南医科大学としたという。初代校長には、郭琦元が就いた（⁵⁸）。

湯紀湖【197】は1924年卒業後、上海東南大学医学院医務長、1936年に同医学院教授となった。また、湯と同期の趙師震【192】は、上海東南大学医学院教務長代表、南通医学院医科教授兼内科医長。1936年に東南大学教授になっている。浙江省立医薬専門学校に勤めていた邵巖【233】は、のち上海東南医学院にも転じている。陳倬【171】も同校教授であった。

1925年に卒業した張錫祺【207】は、上海東南大学医学院眼科教授、上海自然科学研究所研究員・嘱託に就いた。張は、湖北第一陸軍医院に軍医として勤務していた経験も持つ（⁵⁹）。同じ年に卒業している張效宗【217】も同医学院の教授を勤めた。

d) 江蘇省南通医学専門学校および南通医科大学

江蘇省南通市は、清末から民国初期に活躍した民間企業家・政治家として知られる張謇（⁶⁰）が、日本をモデルとし、近代的教育や社会公益事業を展開した上海近郊の地方都市である。張謇は自らの構想の一環として南通医学専門学校を設立した（⁶¹）が、その学校の責任者に据えられたのは、千葉医専出身（1906年入学、11年修了）の熊輔龍【24】であった。同校の教師はほとんどが日本留学組であり、また外国人教師として日本人、ドイツ人がいたため、日本語・ドイツ語を学ぶ必要があったという（⁶²）。

またその後身の南通学院医科（南通大学医学院、南通医科大学）に、金子直【63】、黃家政【109】、趙師震【192】、許枏【193】、黃裕綸【219】、章志青【226】等が教授などの肩書きをもって勤務していた。また闕行健【25】、李希賢【76】、李復真【107】、金銘裕【135】が、南通

市内の医院などで働いていたことが確認できる。

e) 江西省立医学専門学校

1921 年、何煥奎【62】や東京医学専門学校を卒業した曾貞らによって、設立され、初

[表 16] 中華民国における医学校および卒業生数一覧 (1929 年まで)			
	学校名	第一期 卒業年	1929 年まで の卒業生数
1	天津海軍医学校	1886	197 名
2	浙江私立広済医学校	1889	134
3	私立広州夏葛女医学校	1902	176
4	北平陸軍軍医学校	1906	773
5	国立北平大学医学院	1916	363
6	私立南通医科大学	1916	171
7	浙江省立医薬専門学校	1916	556
8	上海国立同済大学医科	1917	175
9	遼寧医学専門学校	1917	158
10	南満医学堂	1917	161
11	上海私立南洋医科大学	1920	260
12	上海私立同徳医学専門学校	1920	93
13	華西四川協和大学医科	1920	37
14	湘雅医学専門学校	1921	51
15	北平協和医科大学	1924	39
16	山東私立女医学校	1925	49
17	遼寧同善医学専門学校	1925	133
18	私立上海東南医科大学	1926	107
19	江西省立医学専門学校	1926	33
20	山東医学専門学校	1927	35
21	河北大学医学院	1927	63
22	広州国立中山大学医科	1927	33
23	私立青島医学校（同仁会）	1928	5
24	満州医科大学	1929	14
	計 24 校		3816 名

代校長には何煥奎が就任している。

1920 年卒業の李属春【139】、21 年卒の劉清淑【159】、25 年卒の旋迪【204】が、同校で教員をしていた。

f) 中華民国の医学校と卒業生

1929 年までの中華民国医学校卒業生総数」を左に掲げた（⁶³）。これに拠れば、1886 年以降に卒業生を出した医学校は全国で 24 校あったが（総数は 3816 名）、その中で、浙江医専は全体で 2 番目に多い 556 名（15%）もの医学生を輩出していた。さらに、千葉医専出身者が多く勤めていたとして紹介した 5 校（浙江、北平大学、南通医科大、東南医科大、江西医専）の卒業生合計は 1230 名を数え、全体の 32% に上る。

1929 年に中国人が著した論文「中国医薬教育之現況」では、清末以降海外に留学して帰国した数について、ドイツ帰り 20 余名（1924 年調べ）、英米 50 余名（26 年）、日本 120 名（20 年）にのぼるとした上で、120 名の「うち、千葉医大、最も多し」と記している（⁶⁴）。

一方、同仁会（後述）が 1930 年に発行していた『中華民国日本

医薬出身者名簿（第 4 版）』には、1100 余名が掲載されている。そして、「中国における新医の現在数は如何と見るに、およそ五千名と註せられている。そのうち三千五六百名は

中国内の諸学校卒業生であるというから、残りの千四五百名が諸外国に留学したもので、その三分の二が日本医薬学の出身者ということになる。何とすばらしい勢ではないか」とのコメントが添えられていた⁽⁶⁵⁾。

[表 16]と 1930 年の数値がおおむね呼応するので、1929 年「中国医薬教育之現況」のデータは何らかの誤認が含まれていると思われるが、いずれにしても、日本帰り（とりわけ千葉医専・医大OB）が、中華民国の医学界で高い比率を占めていたと言える。在漢口的外交官は、「医学界に於ける本邦留学出身者の勢力は、遥かに欧米出身者を凌ぎ、当地に於ては数に於ても、また地位に於ても、全然本邦留学出身者の独占舞台たるかの觀を呈す」⁽⁶⁶⁾との報告を 1935 年に残している。

日本留学生の数が欧米留学者に比して断然多かったのは確かであった。しかしながら、中国国内の医薬界での影響力は、欧米帰りの方が大きかった。1936 年に中国の医学状況を視察した東大医学部長の永井潜は「残念なことに現在日本は負けている。中国の医事衛生を左右する力はほとんど英米派に握られている。(略) 英米の力が跋扈しているのであるが、かように日本派の圧迫されている主な原因は何処にあるかといえ、どうも足並みの揃わないことであります。中華民国の卒業生と母校との間に密接な連絡をつけた民国文化の事業に関係ある諸団体相互の協同工作が、最も大切でありましょう。由来中国に対する日本の政策の失敗は、軍部と外務との調子が揃わなかったためだとさえ言われているではありませんか」⁽⁶⁷⁾と指摘する。

問題は永井の言う「足並みが揃わない」ことだけではなく、やはり中国に対する軍事的強圧的態度が大きな要因であった。しかし、それだからこそ、日本政府は日中関係の糊塗修復を図るため「文化工作」に力を注ぐ。医学関係も例外ではなかった。

③同仁会と千葉医専・医科大卒業生との連携とその問題

同仁会は、1930 年代において、そのギャップを補うことを担っていくことになる団体であるが、そもそもの目的はやや異なる。同会の創設は、日露戦争前の 1902 年であり、「清韓其他亜細亞諸国に医学薬学およびこれに随伴する技術を普及せしめ、かつ彼我人民の健康を保護し、病苦を救済するにあり」を会の「目的」に掲げ、「清韓其他亜細亞諸国に対し、医学校薬学校・医院および薬局の設立」をすること、「留学生および薬学生の留学を勧誘し、かつその留学生を保護し、修業の便を与えること」などの事業を行なうことを標榜していた⁽⁶⁸⁾。実際の活動としてはアジア全体というよりも、中国との関係構築を中心に置き、1913 年には、北京に同仁会医院を、のちには漢口や青島等に関連病院を建設、また日本人医師派遣により、現地の指導を行なった。

さらには日本に留学している中国医薬学生との懇親会（後述）などを開き、関係性の強化にも努めようとした⁽⁶⁹⁾。日本人の医学生を夏休みに中国に派遣し、現地の事情を研修させる事業も展開していた（1937 年の夏には、同仁会が経営する北京医院、漢口医院、青島医院、済南医院に十五名を送り出している。千葉医科大学学生の神谷博達・大場芳雄も

派遣学生に選ばれ、7月15日青島に到着したが、すでに北京郊外盧溝橋で日中両軍が戦闘を開始しており、研修の目的を果すことはできなかった（70）。

同仁会が発行していた雑誌『同仁』には、中国における日本留学者の影響力の低さを嘆く論考がしばしば掲載されている。たとえば、「米国留学者は米国の医師団体と連絡を取って、社交上においてもまた学術上においても立派な団結が出来ております。これは、英国仏国ドイツ留学者もまた同様であります」。「留日医師の数は随分多いのでありますが、今日（引用者註—1931年初め）まで、之に類した団結はなく、上海在留の邦医が五十名あっても平素何等の連絡がありませんから、留日医師と面識のある者もほとんど無い（略）何等かの方法によって、もっと完全に提携が出来ねばならぬものだらう」（71）などの声がその代表的意見である。

その改善を模索する方途としてか、同会機関誌には元留学生の医学関係レポートもしばしば掲載されている。その中には、千葉医専卒業生の論文もあり、確認できたところでは、「南京衛生部」の肩書きを持った金子直【63】が、「論中医（漢方医）之運命」（『同仁会医学雑誌』1930年3月号）など数本を投稿しているほか、黄裕綸（南通医科大学教授）【219】の「判定輸血適否之簡易法」（『同仁医学』31年10月号）、沈王楨【13】「軍人外科之管見」（同31年11月号）などがあった。

同会は1928年1月からは、『同仁会医学雑誌』を中国語版で発刊している。同誌の29年7月号から「民国医界名士録」という記事が連載され、千葉医専、医科大出身者も多く登場している。名前だけ挙げると、金宝善【122】（29年7月号）、朱其輝【61】、金子直【63】、侯毓汶【7】（以上、同年10月号）、丁求真【49】、郭琦元【169】（以上、同年12月号）、李定【45】（29年7月号）、王佶【198】（30年2月号）、鄧光濟【105】（30年7月号）、湯紀湖【197】（30年9月号）の10名がその履歴や業績を紹介されていた。

また1929年2月号（p41）には「千葉医科大学教授 医学博士 松本高三郎先生」という顔写真付きの囲み記事が掲載されている。そこには、松本が1924年から28年まで学長を務めていた略歴とともに、「千葉医大は専門学校時代より、民国留学生を頗る歓迎し、そのため、松本先生の薫陶を受けた者は少なくない（原文中国語）」と紹介されていた。

中国留学生との親睦を図るための「中日医薬学生懇話会」は、年に二回東京で開催されていた。たとえば1929年11月30日に行われた第六回懇話会には、留日中国学生57名、日本人学生21名、来賓16名（留日学資江監督・姜琦、外務省文化事業部長・坪上貞二、東京帝大医学部部長・林春雄ほか）、同仁会会員16名の計110名が集まった。57名の留学生の中には、千葉医科大学からの7名も含まれている（72）。

母国の教員になった元留学生が教え子を引率して、同仁会を表敬訪問するケースも少なくなかった。1929年4月には、浙江省立医薬専科学学校学生20名が、千葉医専卒業生の孫遵行【168】等の引率で、さらには1935年4月にも同校の学生41名が章志青【226】の引率で訪問を果している。後者は2週間あまりの滞在で、千葉医科大や東京の医学校、病院、また工場の見学、また日光・京都・奈良へ廻り、神戸から帰国の途に就いている（73）。同年9

月にも、千葉医大で学んだ元留学生である、上海・東南学院院長・郭琦元【169】、教授・陳卓人（陳倬）【171】の来日歓迎会が同仁会によって催されている（⁷⁴）。

中国医学関係者との座談会が機関誌に掲載されることも一再ならずあった。1935年7月15日に東京麹町・宝亭で行われた「中国医界名士座談会」は10名（中国6、日本4）によるものだったが、千葉医科大OBの陳卓人（東南医学院教授）、および千葉医科大皮膚科副手であった王烈【238】が出席している（⁷⁵）。翌36年8月14日にも同じ会場で「中華民国医事衛生座談会」が開かれ、13名（中国6、日本7）の出席者中には、湯蠡舟（紀湖：東南医学院教授）【197】と章志青（浙江医薬専科学学校教授）【226】が含まれていた（⁷⁶）。

また、同仁会は1927年から「華文医薬学書刊行会」を立ち上げ、日本の研究書を中国語に翻訳出版する企画も行なっている。1942年までに31種類発刊し、三版を重ねた好評書もあったというが、そこに千葉医科大関係者も関わっている。小澤修造著『内科学』は、蹇先器【141】がその全4巻の翻訳を担当した（第1巻は、呉祥鳳【64】ほかとの共訳）。蹇は、『皮膚及性病学』、『泌尿科学』の翻訳も行なっている。茂木蔵之助著『外科学』全3巻の訳者には、李祖蔚【186】、孫遵行【168】が加わっている。また一方で、千葉医科大教授でもあった長尾美知ほか共著の『小児科対症療法』、筒井八百珠ほか共著『臨牀医典』も他大学の元留学生の手によって翻訳出版されていた。

これらは、1943年6月に出版された『同仁会四十年史』（p196~203）の記載に拠るが、さらに「翻訳中、印刷中」の近刊として、葉曙【237】が、井上善十郎『近世衛生学』、石川信夫『簡明看護学』、伝染病研究所編『細菌学実習提要』を、柳歩青【260】が東京高等歯科医学校編『歯科医学』を、陳希声【251】が宮川米夫『人体寄生虫学』をそれぞれ翻訳する旨も予告されていた。

確かに、同仁会によるこうした活動が、中国の医薬関係者との連携を強め、相互協力関係を構築したことは、一方で間違いない事実であろう。とりわけ、医薬書の翻訳は、学術性・実用性ともに高く、中国人のニーズにも十分応え、売れ行きが好調であったという（⁷⁷）。

しかしながら、満州事変以降、とりわけ日中戦争勃発以降は、中国における日本の影響力を強めるための文化工作的要素がより前面に出て、反発を買っていった側面を見逃すことはできない

1932年は、同仁会設立30年の節目であったが、次のような本音あるいは愚痴が機関誌に載せられている。「支那内地における同仁会の病院事業は多年の努力にも拘らず、支那側の歓迎する所とならず、患者側よりも感謝を受けておらず、いわゆる文化侵略の手先と看做され、今は色々の点において、かえって手を焼いておる（略）病院の位置は常に日本人に便利の中心地選ばれてあり、支那人に対する一視同仁の精神は大いに疑わしい（略）支那人を眼中に置いていないと曲言する者がある。（略）各国が各自の優越感を振り廻して高圧的、否時として覇道的態度を以て、支那に臨んだという従来 of 行き方には今後大いに戒慎を要するものがある。（略）同仁会の経営には、一もこの高圧、強制の跡を認めないものであるが、しかも尚ほ文化侵略として、之を曲解する者があるという。これほどの見当違

いが世の中にまたとあろうかと、我々は言いたくなる」(78)。

これは同仁会幹部が、中国側の「曲解」と断言し、ひたすら嘆くだけの文章だが、他方冷静に見ている論者もいた。日本で医薬を学び中国に戻っている者の「現在の状況はどうかと申しますと、久しい間続く排日の関係で、日本に留学した学生は、時に多少の消長がありましたが、何れかと云うと大体において余り得意でない。(略)日本留学出身者であるが為、近頃(引用者註—1936年初)は比較的振っていないようです。今日どんな病院に行きましても、また医学校へ行きましても、日本留学出身のお医者様は非常に少ない」のように。そして、現実主義に立つこの論者は、「しかしそのうちまた勢力を盛返す時期が、政治的に変化を呼起して来るのぢやないかと思います。日華の関係が深くなればなる程、一番利益を受けるのは日本留学生だろうと思います。(略)さらに留学生を親切に世話し、安心して勉学出来るように尽力することは、日本と中国との連絡を密にして、東洋の文化を高揚させる上に、最も大切な最も意義あることぢやないかと思います」(79)と、希望的観測をもって文章を終えている。

盧溝橋事件からちょうど一年経った1938年夏、北京で日中の学者たちが集い、相互連携をもって、両国の文化的連携を強固にし、「東亜學術」振興を謀ることを目的とする「東亜文化協議会」が創設された。その下部組織である「医学部」の会長には金沢医専出身の湯爾和、医学部長には森嶋庫太が選出されたが、千葉医専出身の呉祥鳳【64】は医学部副部長に、評議員(日本人9名・中国人4名)に、同じくOBの方肇【20】と侯毓汶【7】が就いた。つまり「医学部」においては、中国人が就いたポスト6つのうち3つを千葉医専・医科大の卒業生が占めていたのである。これは、中国医学界の日本留学者たちの間で、長年にわたり、千葉関係者が担っていた役割の大きさを改めて認識できる事象とも評せる。しかしながら、一方、この「東亜文化協議会」は日中戦争下の日本が主導して立ち上げた組織として、後に批判を蒙る組織でもあった(80)。つまり、元留学生たちは、日本との友好連携を模索しながらも、1930年代末から40年代の政治力学の中で、結果として「日本の文化工作の協力者」となってしまうような悲劇的局面に立たされていくのであった。

戦時下における日中の「交流連携」の事実関係とその評価は、多くの複雑な要素をはらむ。この問題についてはまた機会を得て、本格的に論じられたら、と考えている。

おわりに

1931年4月、千葉医科大2年次在籍生の王烈【238】が、母校の紹介をある雑誌に行なっている。「千葉医大は相当に古い歴史を持って居ります。(略)本学に於ける諸先生方は吾々留学生に対して、相変わらず非常な熱情と親切を尽され、同学もよく了解して、互いに心持よく勉学の方面にも交遊の方面にも、国籍を超えて和気藹々として居ますから、吾々の本学に於ける学生生活は非常に愉快なものであります。(略)当地は一般の人が儉朴醇厚、風習も良好なので、学校に於ける師友以外の人々もまた親切にしてくれるのは心から嬉し

く思います」⁽⁸¹⁾ 云々。

また1936年8月に中国の医療状況を視察した東京帝大医学部長・永井潜が、北平大学医学院教授の4名が千葉出身であったことについてこう述べている。「千葉は夙に医専時代から中国の留学生には大いに同情し関心を持たれていたもので、所謂蒔いた種が今芽を出したので、千葉出身者は中国では多数重要な位置にあるのであります。(略—中国・青島で同仁会が第一回医学大会を開いた際、千葉出身の日本人教員、元留学生、青島の衛生課に勤めている若い人が多く出席し、同窓会である「猪の鼻会」が開かれるなどしており) 同学出身者教育の事業が非常に楽しい、実に意味深いものである事を痛切に感じたのでした」⁽⁸²⁾。

本稿は、千葉医学専門学校、千葉医科大学における留学生の歴史について、中国留学生を中心に整理してきた。その概要を簡単にまとめておく。

千葉医専は、いわゆる「五校特約」の一つに選ばれたため、その受入期間(1908～22)において毎年10名あまりの中国学生が入学したが、彼らに「非常な熱情と親切」による教育を行なってきた。また、1911年の辛亥革命に際しては、学生たちが一時帰国し、赤十字の旗の下で緊急医療活動に従事することを大学側が快く認め、また緊急医療講習会開催などの便宜も図ったことは、その「熱情と親切」が最大限発揮された場面であり、それが復学後の「記念碑」建設というモニュメントに結晶し、今日に繋がっている点は強調したい。

そして、中華民国成立後は、多くの千葉医専・医科大の卒業生たちが中国各地に創設されはじめた近代的な医学校の教員に就く。その数は、日本の医学系大学の中でも群を抜いて多く、OBたちが草創期の中国近代医学教育に果たした役割は甚大なものがあつたと見てよい。先に引用した王烈、永井潜の談話は、千葉医専・医科大が留学生に対し、注いだ教育的情熱とその成果を、現役留学生の眼と外部の眼、いわば異なる立場の者が口を揃えて評価しているものと捉えることができ、筆者もこれらの教育あるいは交流の成果については高い評価を与えたいと考える。

しかしながら、1937年7月の日中戦争勃発とその泥沼化は、中国留学生の新規入学者の数を大きく減らす[表5]とともに、中国医学界の要職に就いていたOBたちと日本医学界との「戦時下における協力連携」というきわめて政治的な問題も惹起していくことも指摘してきた。この問題については、ごく一側面に触れただけだが、本格的な検討が必要になってくるであろう⁽⁸³⁾。ましてや戦後(解放後)の評価を含めた全体像については、まったく未調査・未検討である⁽⁸⁴⁾。難しい問題ではあるが、今後の課題にしたい。

本稿では、当初、明治大正期における留学生の生活面や社会文化的側面についての叙述も用意していたが、思いのほか分量が多くなったので、割愛することとした。別稿をまとめる計画もあるので、その際にそうした側面の紹介も果していきたい。

[付記]

本稿の史料収集に関して、『会員名簿（ゐのはな同窓会）』閲覧や『ゐのはな同窓会報』掲載記事の紹介等に格別の便宜を図ってくださった医学部・木村定雄先生、資料収集に協力・助言をいただいた「ゐのはな同窓会事務局」、薬学部事務室、千葉大学附属図書館亥鼻分館の皆様方に深謝申し上げたい。また、貴重な保管史料を閲覧させていただいた外務省外交史料館、早稲田大学図書館、東京都立大学図書館（実藤文庫）にも、併せて謝意を表したい。

- 1 小島淑男『留日学生の辛亥革命』、青木書店、1989年。同書第Ⅷ章は、千葉留学生を主題とした小島「辛亥革命と千葉医専―留日学生同盟中国紅十字隊を中心に―」『千葉史学』7、1985年、が元になっている。
- 2 崔淑芬『来日中国著名人の足跡探訪』中国書店（福岡）、2004年。
- 3 宮崎滔天と孫文の交流などの逸話は、崔著作をはじめ、取上げている一般書、研究書は枚挙に暇ない。一方、千葉医専などの紅十字隊結成については、宇野俊一他編『千葉県の歴史』（山川出版社、2000年）が、「激動の中国に帰る医学生を送る」という2頁のコラムとして、言わば「地域史」の一コマとして紹介している事例などもあるが、ごく少数にとどまる。
- 4 『千葉大学医学部八十五年史』（1964年）に収録されているあるOBの回顧の中に、辛亥革命時の印象記が含まれている（p555）が、それ以外に、特別な節が設けられている訳ではない。『千葉大学医学部百周年記念誌』（1978年）については、本文中の記述はないものの、冒頭の口絵写真において、帰国した留学生が建てた「感謝の碑」（補足史料8）の紹介がされている。『千葉大学薬学部百年史』（1989年）にも関連の叙述はない。

なお、医学部関係者が碑文を紹介する文章として、①小林辰男（医学部名誉教授）・鴻忠義（防衛大教授）「千葉大医学部構内の中国留学生記念碑」『日本医事新報』No3315（1987年11月7日）、②萩原弥四郎（医学部教授）「ゐのはなキャンパスさまざま―辛亥革命・留学生派遣記念碑」『ゐのはな同窓会報』No93（1988年3月1日）、③井出源四郎（元学長）「辛亥革命記念碑について」『ゐのはな同窓会報』No121（1999年5月26日）、No122（99年9月13日）、④「亥鼻地区の記念碑」医学部ホームページ（作成年次不明）http://www.m.chiba-u.jp/about/pdf/outline_20_07.pdf、などが管見の範囲で存在する。

- 5 留日中国留学生研究については、さねとうけいしゅう（実藤恵秀）氏の『中国人日本留学史稿』（1939年、日華学会）、『中国人日本留学史』（1960年、くろしお出版）他が先駆的な研究となる。また教育史の分野では、阿部洋氏（『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990年など）ほかの研究も多く存在する。ここでは先行研究の詳細な紹介は略し、山根幸夫他編『近代日中関係史入門』「第10章 日中文化交流、4 中国人の日本留学」（研文出版、1992年）、小林共明「留日学生史研究の現状と課題」『中国近代史研究入門』（辛亥革命研究会編）、1992年、等の整理を挙げるに留めておく。

中国や台湾でも、陳瓊瑩『清季留学政策初探』文史哲出版社（台北）、1989年、田正平主編『留学生与中国教育近代化』広東教育出版社、1996年、李喜所『中国留学史論稿』中華書局（北京）、2007年ほか、多くの研究書が出されている。

なお、近年では神奈川大学の共同研究の成果として発刊された大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』(2002年、御茶の水書房)は、清末から「満州国」までの時代幅で、日中10名の研究者が様々な視点からの論考を提示している。また、同書は大里「清国游学日本学生監督処発行『官報』目次」、孫「外務省外交史料館所蔵の中国留学生関連資料と目次(明治期)」などの史料目録も充実している。本書作成に際し、便宜を得たことを期しておきたい。

一方、大学史研究の角度からは、明治期に留学生を大量に受け入れていた早稲田大学や法政大学などの大学史はそれなりのページを割いているが、国立大学関係での整理は総体として少ない。千葉医専と同じカテゴリーの金沢医専については、稲葉昭二氏の「金沢における清国留学生の記録①～③」『金沢大学教養部紀要(人文科学篇)』21号、1984年がある。これは、金大医学部に残された原史料の紹介を目的としたものである。また、阿部兼也編『仙台における魯迅の記録』(平凡社、1978年)は、仙台医専時代の魯迅に焦点を当てたものだが、仙台医専の実態についても詳しく紹介している。

そうした中、王嵐『戦前日本の高等商業学校における中国人留学生に関する研究』(学文社、2004年)は、山口、神戸、長崎などの高等商業学校について、詳細な資料を整理している。また、東京高等農林学校の中国留学生について、聞き取り等を含め、まとめた研究書に、河路由佳・野本京子・淵野雄二郎『戦時体制下の農業教育と中国人留学生』農林統計協会、2003年、女性の留学生を対象とした研究書には、周一川『中国人女性の日本留学史研究』(国書刊行会、2000年)がある。

- 6 「平成20年度外国人留学生在籍状況調査結果」。日本学生支援機構のHP参照。
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data08.html
- 7 見城「留学生の『日本社会』観、『日本社会』の留学生観」(大平・桂島編『「日本型社会」論の射程』文理閣、2005年)。これは、20世紀初頭と21世紀初頭の留学生受入と日本社会との対応・交流、軋轢などを重ねて、論じたものである。
- 8 当時の国名に従えば、「清」で、革命後は、中華民国または「民国」となる。本稿作成のため、参考にした史料中には、「支那」という表現も存在するが、本稿では原則的に「中国」で統一していく。
- 9 朝鮮留学生については、朴宣美『朝鮮女性の知の回避—植民地文化支配と日本留学』山川出版社、2005年、武井一『皇室特派留学生—大韓帝国からの50人』白帝社、2006年、などの研究がある。なお、山室信一『思想課題としてのアジア』(岩波書店、2001年)は、「思想連鎖の回路としての留学」という視点から、アジア留学生と日本社会との関係性を捉え直そうとしている。
- 10 『勸学篇』の各種版本は、合計で200万冊以上印刷されたという推計もある(孫安石「経費は游学の母」、前掲『中国人日本留学史研究の現段階』、p203)。
- 11 「清国留学生に告ぐ」『読売新聞』1905年12月11日付け。
- 12 中国留学生史研究の先駆で第一人者である実藤恵秀氏は、初期の留学生教育を「少数良質」の時代(1896～1900年)、「多数速成」の時代(1901～1905年)、「質的向上」(1906～1911年)の三段階に分けている。(前掲『中国人日本留学史稿』)。
- 13 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990年、p125。
- 14 前掲、阿部洋、p119。
- 15 山口高商は、1911年に留学生同盟退学事件が起り、翌年受け入れを中止する。そのため、のち明治専

門学校（現、九州工業大学）が「五校」の一つとして補充された。

- 16 前掲『千葉大学医学部八十五年史』、『千葉大学医学部百周年記念誌』。
 - 17 前掲『千葉大学薬学部百年史』。
 - 18 『千葉県統計書』による。なお、1912年の県内人口の第2位は、本銚子町 19,610 名、第3位佐原町 15,967 名、第4位船橋町 13,955 名、第5位銚子町 9,920 名だった。1874年の統計に遡ると、千葉町の人口は 3,110 名で県内第9位（第1位は銚子町の 17,688 名）に過ぎない。1889年の統計では 21,599 名で第1位となるが、本銚子町に 15,587 名、銚子町には 7,730 名の人口があり、合わせると全「銚子」の方がまだ多かった（千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』通史編 近現代 1、2002 年、p721, 723）。
 - 19 花岡和夫「過ぎし日を顧みて」前掲『千葉大学医学部八十五年史』、p571。
 - 20 増島信吉編『千葉町案内』千葉町案内発行所、1911 年 4 月。
 - 21 前掲、花岡「過ぎし日を顧みて」、p569。
 - 22 渡辺宗助「アジア留学生と日本の大学・高等教育」『大学論集』1、広島大学教育研究センター、1973 年。
 - 23 [表 1]に掲載した氏名等は、『校友会雑誌（千葉医学専門学校）』（千葉大学附属図書館亥鼻分館蔵）、『千葉医学専門学校一覧』、『千葉医科大学一覧』（国立国会図書館蔵：一部は国会図書館のウェブ上の電子図書館「近代デジタルライブラリー」から閲覧できる）を基本とし、「中国留日学生監督処文献」（早稲田大学図書館蔵）や東京都立中央図書館蔵「実藤（恵秀）文庫」所蔵の諸史料も適宜参考にした。
- とりわけ、実藤文庫に収められている『日本留学中華民国人吊調（6～10 版）』（興亜院政務部作成、1940 年）は、日本の諸学校が中国学生を受け入れた初期から 1939 年ころまでの卒業生の姓名、卒業年度、原籍、備考（現職など）をまとめ、そのみか「中途退学者」（入学年月、退学年月）も挙げており、便利である。ちなみに、この「調」では、千葉医専・医科大学の卒業生・在学生は総数 152 名、中退者 42 名とされている。
- 一人一人の典拠については、煩瑣となるので割愛するが、史料によって名前などが異なるケースは相当あった。最も簡便にチェックでき、信頼を寄せたいところの医学部、薬学部の同窓会名簿についても、歴年の転記ミス等のためか、氏名の誤記および名簿そのものから遺漏している（と思われる）学生が少なくなかったことを付記しておく。
- 24 小島淑男『留日学生の辛亥革命』（前掲書）は、李喜所『近代中国的留学生』（人民出版社、1987 年）を典拠として、この数値を示している。さらに、小島は 1908 年～1911 年の留学生数を、08 年：5500 名、09 年：5200 名、10 年：4000 名、11 年：3200 名と、新聞史料を典拠に推計している。
 - 25 本稿の 3-a「作成した留学生名簿について」で触れたが、1938 年以降の学生データは、卒業した学生の卒業年次から入学年次を推定したものである。したがって、同期入学で「中退」した人がいたとしても現状では確認できない。卒業率が 100%になっている背景にはそうした事情がある。そして、医科大学時代の卒業率が、医専時代に比して高いことも、そうしたデータ処理に由来する可能性がある（ちなみに、1923～37 年の間の卒業率は 78%である）。
 - 26 浙江省の留学生派遣の特色は、呂順長「清末『五校特約』留学と浙江省の対応」『中国研究月報』1998 年 2 月号、参照。また省による経費負担については、呂の論考のほか、大里浩秋『『官報』を読む』前掲『中国人日本留学史研究の現段階』などを参照。

-
- 27 柴田廉「台湾議會運動の心理的解剖」『台湾同化策論』1923年、p271～272。
- 28 筆者が『千葉医学専門学校一覧』等を参考に作成した[表6]では、1907年次の中国留学生在籍数は26名と異なった数値になっている。ちなみに、前年1906年は19名で、こちらの数の方が近い。
- 29 前掲、さねとう『中国人留学生史』p419。なお、この雑誌の実物は今のところ確認できていない。
- 30 馬伯英『中外医学文化交流史』上海・文匯出版社、1993年、p448。(丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同人会研究④」(『日本医史学雑誌』46-4、2000年、p614、から再引用)。
- 31 外務省外交史料館蔵『在本邦留学生調査関係雑件』第4巻「本邦留学満州国及中華民国学生ノ帰国後ニ於ケル状況調査ニ関スル件」(アジア歴史資料センターHP ウェブ。H-0887. 0326、0329)
- 32 外務省外交史料館蔵「清国革命動乱の際在本邦同国留学生の動静調一件」(3-10-5-19)。
- 33 「千葉医専留学生と革命」『東京朝日』10月27日付け。
- 34 呉を紹介する記事は以下である。
- 「革命軍中の花」(1911年10月23日付け『読売新聞』)。
- 「革命党中に婦女子の花々しき働き振りを見るは、東西其例に乏しくないが、今度の支那革命中にも、数百の婦人が盛に活動してゐる。その年輩は多く二十歳から三十歳までで、自ら実行派と称して国の内外に奔走してゐる。(略)
- ▲美しく散りし秋瑾 是等婦人団を育てたのは、三年前南京で囚はれて斬刑に処せられた南京の警察長官徐熙麟氏である(略)南京出身の秋瑾だけは捕縛された其散際が如何にも美しかった為、小説「秋瑾」と云ふ五十頁の単行本まで出版され、革命婦人の仰慕を一身に集めてゐる。(略)
- ▲女医学生の奮起 目下婦人団の牛耳を執ってゐるのは、浙江省生れの呉破天(22)であるが、同女は姉と兄あり。姉は既に囚れて斬殺され、兄は今革命軍に投じて、戦塵裡を馳騁して居る。呉破天は一昨年四月来朝し、千葉医学専門学校長荻生録造氏の許にあつて、医学、看護学、産婆学を学び、外科手術に堪能であつたが、在留二年にして、本月上旬急遽帰国。今や赤十字の組織に熱中し、洋装して医書を手にしながら、得意な英語で上海辺を遊説して居ると聞く。其の美しい姿と医学研究と云ふ事が巧みに官憲の眼を眩惑させて、未だに革命党なる事を知る人が少ないとか。尚ほ日本女医学校に学んだ婦人が数十名同女の計画を助けてゐるそうである」。
- 革命運動に関わる女性に対し、好奇の視線を強く浴びせている記事であり、そうした観点からの批判的考察は必要だろうが、その掘り下げはここでは課題としない。
- 35 「赤十字軍と顧問」『報知新聞』11月2日付け。
- 36 「紅十字団の出発準備完く成る」『報知』11月9日付け。
- 37 「妙な男、従軍を望む」『報知』10月31日付け。
- 38 「又々従軍を求む」『報知』11月1日付け。
- 39 「清国事変の救護—清国留学生の奮起」『同仁』1911年12月号、p32。
- 40 「不完全なる清軍医—野戦衛生設備無し」『東京朝日』10月30日付け。
- 41 『東京朝日』同年11月28日付け。
- 42 『申報』同年12月5日付け。(小島前掲書、p217、より再引用)。
- 43 「長沙来柬」(1912年1月27日付け、全徳岩蔵書簡)『同仁』1912年3月号、p16。

-
- 44 桃雨平「武昌起義後粵軍北伐始末」『辛亥革命回憶録』第1号（小島前掲書、p217、より再引用）。
- 45 「民国医界名士録（6）」『同仁医学雑誌』1929年12月号、p58。
- 46 近代日本が中国語をどのような目的で受容しようとしたのかについては、安藤彦太郎『中国語と近代日本』岩波新書、1988年が詳しい。また見城「近代日本の『露清語』教育と東方語学校」（『立命館百年史紀要』4号、1996年）は、日露戦争前後の社会的要請を受け、誕生したロシア語と中国語の教育機関を調べ、時代の思想に掣肘される語学教育のあり方を示した。
- 47 外務省外交史料館蔵「在本邦清国留学生関係雑纂 雑の部」（3-10-5-3-6-①）。
- 48 小島「近代中国における留日学生の役割」『歴史科学と教育』15号、1996年。
- 49 呂順長「清末における浙江省留日学生の帰国後の活躍」（前掲『中国人日本留学史研究の現段階』）。
- 50 興亜院政務局編『日本留学支那要人録』1942年。同書は戦時下の日本（興亜院）が「親日派」との連携などを目的として作成した人物辞典であり、1600名あまりが掲載されている。その中に、千葉医専OB 9名の名を見出すことができた。
- 51 外交省外交史料館蔵「浙江省立医薬専門学校教職員ニ関シ報告」『東方文化事業。参考資料関係雑件。学校及学生関係 第5巻』アジア歴史資料センター ウェブサイト。H-0915。303～306。
- 52 中島半次郎『日清間の教育関係』「第五 外国教習」（1910年、p30）。
- 53 前掲、『日本留学支那要人録』、p192。
- 54 前掲、『日本留学支那要人録』、p85。
- 55 前掲、『日本留学支那要人録』、p61。1941年頃は、東亜文化協議会常任理事職と北京大学医学部副部長の職にあった。
- 56 前掲、『日本留学支那要人録』p51。
- 57 永井潜「中華民國医界視察談」『同仁』1936年10月号、p102。
- 58 前掲、小島「近代中国における留日学生の役割」。なお、同論文の中では、江蘇医科大が閉校された理由、郭たちが上海で再建を図った理由などの詳細については、説明されていない。
- 59 前掲、『日本留学支那要人録』p131。
- 60 張謇とその事績については、見城ほか編『近代東アジアの経済倫理とその実践—渋沢栄一と張謇を中心に』（日本経済評論社、2009年）等を参考にされたい。
- 61 「南通県医院歴史」『南通地方自治十九年之成績、張謇研究中心（センター）・南通博物苑編集発行（中国・南通）、2003年10月、p155。
- 62 呉偉明「張謇の社会事業と日本」（前掲『近代東アジアの経済倫理とその実践』所収）
- 63 「中華民國医師の調査」『同仁』1930年2月号、p36。なお、この報告は、千葉医専出身の金子直（南京政府衛生部）が行なったものである。
- 64 史志元「中国医薬教育之現況」『同仁』1929年9月号、p25。
- 65 「中華民國日本医薬学出身者名簿に就て」『同仁』1930年7月号、p1。
- 66 「本邦留学満州国及中華民國学生の帰国後における状況調査」（在漢口日本総領事館 三浦義秋回答）『在本邦留学生調査関係雑件』（アジア歴史資料センター ウェブ H0887。0218）
- 67 永井潜「中華民國医界視察談」『同仁』1936年10月号、p108。

- 68 「同仁会規則概要」『同仁』第1号、1906年6月号。
- 69 同仁会側の正史として『同仁会三十年史』(1932年)、『同仁会四十年史』(1943年)があるが、研究はそれほど進んでいるとは言えない。しかし、会の会長に大隈重信や近衛文麿が就いていたことから、日本が中国大陆への政治的経済的影響力を保つための、いわゆる「支那保全論」を推進する役目を負わされていたとの指摘(細野浩二「所謂『支那保全』論と清国留日学生教育の様態—同仁会・東京同仁医薬学校を例にして—」『早稲田大学史記要』8号、1975年)、中国の近代医学発展に貢献した半面、日中戦争以降は日本の文化的慰撫(文化工作)の一翼を担ったとの指摘(丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同人会研究①～④」『日本医史学雑誌』45-4、1999～2000年)などの先行研究は重要である。
- また、機関誌として『同仁』(第1次:1906年6月～1916年11月)、『同仁』(第2次:1922年3月～1924年12月)、『同仁』(第3次:1927年5月～1938年5月)、『同仁医学雑誌』、のち『同仁医学』(ともにすべて中国語による:1928年6月～1938年5月)、さらにまた『同仁会報』(1940年8月～1944年9月)が発行されている。これらの雑誌に掲載されている諸論文からも、会の内在的意図を読み取ることができる。
- なお、大里浩秋「同仁会と『同仁』」『人文学研究所報(神奈川大学)』39号、2006年3月、は、同仁会の概説とともに、『同仁』『同仁会報』の目次を掲げ、有益である。
- 70 「同仁会記事—医学生中国派遣」『同仁』1937年7月号、p97。「青島医院遂に引揚ぐ」『同仁』1937年9月号、p30。
- 71 下瀬謙太郎「上海在留の邦人医師」『同仁』1931年2月号、p18～19。
- 72 『同仁会医学雑誌』1930年1月号、p56～57。
- 73 『同仁』1929年6月号、56ページ。『同仁医学』1935年5月号、p87。
- 74 「同仁会歓迎郭琦元氏」『同仁雑誌』1935年10月号、p114。
- 75 『同仁』1935年9月号、p22～33。
- 76 『同仁』1936年10月号、p122～133。
- 77 前掲、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同人会研究④」、p620～621。なお、丁の評価は、「同仁会が(引用者—中国に対する)日本の医学と医療の普及に果たした役割は確かに認められ、とりわけ中国医薬書は両国の関係を超えて受け容れられた。しかし、これら以外の活動は、反日運動の抵抗を受け、ついに同仁会のあらゆる目的の一つとして結実を見ることがないままに終わってしまう(p633)」という点に置かれている。
- 78 下瀬謙太郎「同仁会事業三十年の回顧」『同仁』1932年5月号、p10～12。
- 79 山井格太郎「中国医界見聞談」『同仁』1936年1月号、p63。
- 80 この東亜文化協議会の会長を務めたのは、留日経験のある文学者・周作人(魯迅の弟)であった。彼は日本の敗戦後、日本協力者として一時投獄された(『中国大百科全書』中国文学Ⅱ、中国大百科全書出版社、北京、1988年、p1299。丸山他編『中国現代文学事典』東京堂出版、1985年、p107)。
- 81 王烈「消息(千葉)」『日華学報』22号、1931年4月号、p92～94。同誌は大正～昭和期に存在した留学生支援団体「日華学会」の機関誌。
- 82 永井潜「中華民国医界視察談」『同仁』1936年10月号、p102。
- 83 第一次世界大戦後の反日抗日運動を緩和するため、1923年、日本政府は「対支文化事業特別法」を

制定交付し、外務省が所轄となる文化交流事業を開始する。その中に、中国留学生受入や同仁会への援助なども含まれていた。この事業については、阿部洋氏の1100頁余の大著『「対支文化事業」の研究』汲古書院、2004年、や山根幸夫氏『東方文化事業の歴史』汲古書院、2005年などの研究があるが、本稿ではこれら先行者の存在を挙げるのみに留め、発展的考察は課題とせざるを得ない。

84 1996年に、中国の南京大学出版社から『中国留学生大辞典』（周棉 主編）が発刊された。A4版、631頁の大きめの辞典で、1847年から1978年まで日本や欧米に留学した4000余名が収録されている。その中で、拾い出すことを得た千葉大学関係者は、王穎【56】、方声洞【27】、張錫祺【206】の3名である。王と方は辛亥革命の「烈士」評価に関わるため、という文脈で理解できるが、張が取上げられた理由はなぜか。実は張は東方文化事業の一環として1931年に設立された「上海自然科学研究所」の「細菌学科研究生」に就いていた経歴を持つ（前掲、山根著作、p76）。山根によれば、同研究所は軍部などの権力介入を排除できなかった事実はあるが、比較論で言えば、日中の共同研究活動が進められた唯一の組織であったとも評せると言う（p95）。

本稿では民国期に日本と連携し、活躍したOBが多くいた事を示した。この大辞典では、唯一、張錫祺が取上げられているが、こうした元留学生の現代中国の評価については、後日の調査に待ちたい。

以下、同辞典に載った3名の「事績説明」を日本語に翻訳したものを挙げておく。

王穎【56】（1889～1977）

女。福建省福州生まれ。黄花崗“七十二”烈士の一人、方声洞夫人。1908年、新婚後、夫に随い、日本に留学。千葉医学専門学校に入り、学習す。1909年中国同盟会に加入。1914年北京慈恵産科学校に入り、学ぶ。1918年、首善医院産科主任に任ぜられる。後、自ら資金を集め、声洞産科記念医院を創設しようとしたが、資金不足によって、設置は出来なかった。

方声洞【27】（1886～1911）

字は子明。福建省侯官生まれ。幼時に福州において私塾に入り、漢口に赴き、新制学堂に進む。1902年日本に留学。東京の成城学校に学ぶ。1903年、拒露義勇隊に参加。1905年、中国同盟会に加入し、積極的に反清革命運動に参加。まもなく、母の病のため、福建に戻る。1906年、日本に再び戻り、千葉医学専門学校に入る。中国留学生総代表。同郷会議事部長、同盟会福建支部等に就く。1908年、母国に帰り、結婚。休暇を終え、妻と共に来日し、同盟会入会を紹介する。1911年春、革命軍は広東で挙兵したことを知り、広東に赴き、革命軍に参加し、軍備の密運を行なう。1911年4月27日、広州で革命に参加した時、犠牲となる。黄花崗“七十二”烈士の一人である。

張錫祺【206】（1898～1960）

福建惠安生まれ。1908年、母とともに、日本の神戸に行き、生計をはかる。のち“庚子賠款（義和団賠償）”の公費生に合格し、千葉医学専科学校医学部で学ぶ。1925年卒業後、同校付属医院で学問を深める。1926年、台湾に赴き、光華眼科医院を創業。1930年には上海に移り、東南医学院に勤める。1949年後、東南医学院は安徽省懷遠県に移り、その後、合肥に行き、安徽医学院と改める。その間、東南医学院眼科教室主任を担任した後、院長、安徽医学院院長、中国科学院安徽分院副院長、中華医学会安徽分会理事長などを歴任。眼底病の専門家。1936年免疫体および細菌毒素の角膜通過に対する実験研究を行い、大いに成果を得る。主著に『眼底病図譜』がある。

『清国革命動乱の際 在本邦同国留學生の動靜取調一件』(3-10-5-19)

「千葉同学全体組織赤十字會回国敬求留日學界商界諸同胞贊成助捐啓」

千葉同學全体組織赤十字會回国敬求留日

留日學界商界諸同胞贊成助捐啓

西望神州。戰雲四起。短衣。羈帽。衝斥於烽烟彈雨中者。非我最親愛最思慕之諸叔昆弟乎。一隅與我。四方振旅。彼等拂袖而起。慷慨從軍。非不知干戈槍炮之間。投之多。軀命危險。而必欲如是者。迫於滿腔熱血。誓甘死如飴也。中國同胞。近年來死於水旱天災。不知占如何數。率仁人志士。莫不奔走呼號。殷々爲同胞救求其溺死者之復蘇。夫以不知死而死。其死可憐。本知死而就死。其死更可哀。知死就死。而猶未死。坐於同胞之病癰。無與視死。勿救而致之死。其咎更將誰任。凡孺子將入於井而思救人。誰無天良發現。乍見傾軋。再思逡巡。重於目前之利害。安危人勝者。而天遂泯。雖仁人有慈悲大難。不取手從井救人。而損己之至輕。可以全人之至重。而猶畏難不前者。吾可以鄙其人之無識。人以保吾之至輕。與至重。擲其己之至重。吾猶不損其至輕。救護人之至重者。吾更疾惡。惱恨其爲人之絕無天良。中國不幸而啓今日之殺機。革軍入險。而攻官軍列營。而襲中原腹地。遍動干戈。非從來一隅滋亂可比。戰爭慘禍。將不知伊胡底止。瘡痍呼救言之寒心。各國當戰爭時期。皆有赤十字軍爲負傷兵士救護。中國向無赤十字會之設。近聞沈胡熊諸巨公發起赤十字會。戰傷者藉以救護不少。然以中國醫家缺乏。醫治半資外人。以少應多。勢所不給。閱日報章所記。官軍革軍皆無完全衛生隊。負傷兵士乞外人病院收容。能活幾何不難。目視原谷國赤十字隊性質不分。秦越概爲治療。男子婦人皆可從事。夫以異族而猶相救護也。何況吾同胞以婦女而猶爲社員也。何況吾男子做同學。恥見吾中國同胞輾轉鋒鏑。自以男子而猶逍遙海外。審其輕重。以爲人之軀命至重也。吾之目前金錢學業至輕也。吾同胞知死就死。而猶未死之間。吾不棄己之至輕。救護吾同胞之至重。吾同胞之死。我任其咎。我實自絕其天也。做同學不忍自絕其天。議決組織赤十字會。全体回国。惟赤十字會以施療爲本旨。開辦經費至少須數萬金。做同學力薄如棉。雖罄行李而無當毫末。且做同學人數亦少。得凡留日醫藥界同學聯袂同行。更增力萬々。爲此不得不哀呼號於吾

留日諸慈善同胞之前。大賜贊成。慷慨爲做同學助。

一、全醫藥界同學。吾儕學醫。原以救人爲宗旨。扶氏醫戒十二要。醫家道德。已言之詳。無俟做同學瑣々。中國此時戰難方興。坐視不歸。學醫胡用。即初入學諸同志。程度尙淺。未知應用學。而纏帶消毒。術見習數日。已足抵看護婦。而有餘學。問不深。未容藉口。即以學業論。做同學已習識萬全。革軍官軍。無論孰勝孰負。戰禍平定。吾儕誓必重來日本。再入原校。做同學可退。

諸君亦可以興矣。行期在即。啓到即祈首途。赴東京總會。集會所深望焉。

一、全留學界同學。日本報章記諸同學關心祖國。日廢學業。而俟號外。見同學愛國熱忱。已達極點。做同學日來屢接東京諸同學推鑒。催促速組織赤十字會。當代爲擔任經費。更見諸同學不忍聞吾中國同胞之創傷痛楚。失治喪生。做同學不敢於吾諸同學仁人大雅之側。妄曉唇舌。當仁不讓。衆所稔知。局外歎憐者。皆虛殫力。救援斯見本性。

諸同學其有以贊助我也。是則做同學所逆料者。

一、全商界諸叔昆弟。從來慈善事業。恆見之於商家。巨富解囊。勝於貧儒破產。中國各省頻年來天災流行。哀鴻嗷々。莫非賴商團賑濟。日俄戰役。我僑口諸叔昆弟捐助巨資。救護日本戰傷兵士。至今膾炙人口。播爲美談。我諸叔昆弟憐愛吾中國同胞。自爲於憐愛日人萬々。而救死於天災之不得已。不如救知死就死之可哀可敬可慕諸戰傷兵士之踴躍慷慨。更無俟言。諸叔昆弟中吳君錦

學捐資數萬金組織赤十字會誌之日本報章見者傾倒吳君錦堂同贊助做同
 學此舉者也其餘
 諸叔見弟願無以仁者讓吳君錦堂獨為嘉惠鉅資成就做同學此志此事做同學
 之幸中國諸同胞之福也
 再做同學組織赤十字會全係純粹的萬國赤十字會性質毫無官軍軍之分
 遇傷施療勞從事自家生活加意刻苦出入會計提請助資
 諸公派人經理做同學絕不與聞戰禍一平做同學誓再來日本留學不惟利不敢
 取即名亦不敢居焉特此聲明組織赤十字會簡章容後刊告並啓

留日千葉醫學生

李	定	謝	瑜	馮	元	亮
陳	任	標	劉	之	綱	余
吳	亞	良	毛	綬	泉	李
李	垣	昌	鄧	以	蟄	張
姚	夢	虔	許	普	及	何
金	子	直	朱	清		黃
何	煥	奎	陸	繞	陽	崔
朱	其	輝	蕭	登		鄧
丁	求	真	李	潤	鼎	石
徐	寅		陳	佩	完	姚
田	龍	瑞	趙	錄	敏	陳
恩	和		崔	雲	史	振
吳	祥	鳳	李	希	賢	聲

同 啓

【補足史料1-2】外務省外交史料館所蔵 外交文書

補足史料1に挙げた「千葉同学全体組織赤十字会回国敬求留日学界商界諸同胞賛成助捐啓」を、外務省職員が「摘訳」した文章を以下に翻刻、収録する（出典は、1-1と同じ）。

千葉同学赤十字会組織帰国ノ件ニ関シ、謹シテ留日学界商界同胞ノ賛助ヲ求ム

中国不幸ニシテ、今日ノ禍機ヲ啓ク、革軍險ニ入テ攻メ、官軍營ヲ列テ禦キ、中原ノ腹地遍リ、干戈ヲ動カス。従来一隅ノ滋乱ト同視スベカラズ。而シテ戦争ノ惨禍ハ其底止スル所ヲ知ラザル也。今ヤ我同胞ハ瘡痍呼救ノ状ニアリ。依テ、敝同学今回議決シテ、赤十字会ヲ組織シ、帰国シテ以テ救護ノ事ニ従ハント歎ス。但赤十字会ハ施療ヲ以テ、其本旨トナスヲ以テ、其所要ノ経費ハ少クトモ、数万円ヲ要ス。依テ茲ニ我留日諸慈善同胞ノ前ニ呼号シテ、賛助ヲ請フ次第ナリ。且敝同学ハ人員亦甚少シ。

就テハ留日医薬界同学諸君ノ連袂シテ、同行セラレンコトヲ得バ、カヲ増ス。更ニ万々ナラン。

一、医薬界同学諸君。吾人医ヲ学フハ、原人ヲ救フヲ以テ目的トナス。中国此戦難方ニ興ルニ際シ、坐視シテ帰国セザレバ、医学何用ヲカナサン。敝同学ハ今帰国スルモ、将来戦禍平定セバ、再日本ニ帰リ来ルウコトヲ誓フモノナリ。吾人ノ行期近キニアリ。同志ノ士ハ東京総会館ニ来集セラレンコトヲ希望ス。

一、留学界同学諸君。敝同学ハ近日屢東京諸同学ヨリ、赤十字会組織方ニ関シ督促ヲ受ケ、代リテ経費ヲ負担スベシトノ通知ニ接シタリ。依テ、吾人ハ諸同学ハ当然吾人ノ賛助セラルルモノト信ズルニアリ。又諸同学仁人ノ前ニ贅言ヲ呈セザルナリ。

一、商業界ノ諸兄弟諸君。中国各省頻年天災流行シ、皆我商業界諸士ノ賑恤ニヨラザルナシ。又日露戦後ノ際ニ方リテハ、我留日ノ諸兄弟ハ皆巨資ヲ捐助シテ日本戦傷兵士ヲ救護セラレタルコトハ、今尚人々ニ膾炙シテ美談トナス。吾人我同胞ヲ憐愛スルハ、自ラ外人ヲ憐愛スルヨリ、篤カルベク、又我同胞ヲ天災ヨリ救フハ、死ヲ知り勇躍シテ、死ニ就ク諸兵士ヲ救フニ如カラザル也。曩ニ吳錦堂君ハ已ニ敝同学ノ挙ヲ賛助セラレタリ。就テハ、自余ノ諸兄弟モ吳君ノ如ク鉅資ヲ嘉恵シ、敝同学ノ志ヲ成就セシメラレンコトヲ希望シテ止マザル也。

之レ敝同学ノ幸ノミナラズシテ、実ニ中国諸同胞ノ福ナリ。

追テ敝同学組織ノ赤十字会ハ全然純粹ノ万国赤十字会ノ性質ヲ有スルモノニシテ、毫モ官軍革軍ノ區別ナシ。即負傷者ハ悉ク之ヲ施療シ、殷勞事ニ従フベク、敢テ利ヲ取ラザルノミナラズ、名モ亦居ラザルナリ。右特ニ茲ニ声明ス。

留日千葉医学生 李定 外三十六名一同

【補足史料 2】『校友会雑誌』第 55 号、1911 年 12 月号、千葉医学専門学校校友会発行

○在校清国留学生故国の急に趣く（p61～63）

秋は方に山茶花にて飾られたり。日は暖く寒からず。打ち続きたる日本晴の今日此ごろ、静に空に画ける鳶の輪までも安穩に見ゆる好時季なるに、茲に又た久しくは円かりし隣邦の夢は一朝にして破れ、風雲の急を告げて戦乱已に開く。寔に人道の惨事たり。加之戦場の負傷者に対して、何等設備することなきに於いては、血あり涙ある人士、いかでか酸鼻の感無きを得んや。我が千葉医学専門学校在学留学生諸子率先して、帰途に上り、以て同胞傷病者の救護に赴かんとす。其行や壮にして其主義美なり。於之か、同情後援の声は校の内外に起り、留日医学界中国赤十字会は忽ちにして組織せられたり。

先是該団隊は、結束將に帰国せんと決するや、救急処置を速成に聴講することとなり、県立千葉病院に於て之が講演を開きたるか、其の際に於ける荻生校長の訓示の大意は、左の如し。

清国留学生諸君、諸君は今回貴国の戦乱に就き、彼我病傷者救療の目的を以て、救護団隊を組織し、不日將に出発せんとす。而して其の間若干の余日あるを利用し、救急処置に就きて研鑽を遂げんとし、其の講演を請はる。余は人道上、深く其の拳を好するを以て、請を容れ、三輪・井上・筒井の三博士及平野氏に謀りて賛助を求め、且森、須田、岩月の三氏に囑し、該講筵を開かんとするに方り、一言諸君に注意せんとするものあり。

顧ふに戦争の惨害は著大にして、文明の精神とは氷炭相容れざるものなるにも拘はらず、全然全滅すること克はざるは遺憾なるも、亦已むを得ざる処なり。故に其の発起するに際しては、可及的惨害を大ならしめず。更に進んで力の及ぶべき限り、之を小ならしむることに努むべきは、是蓋し文明の精神を発揮するの途なるべし。而して惨害の最も恐るべきは貴重なる人命を損することの多きに在り。されば此損害を小にするは、即ち戦争の惨害を小にするものにして、戦死者は施す可き策なきも、傷者及病者の多数は、之を救ひ得べき途の存するに拘らず、其の途を講せざる為、輾転苦吟しつつ、終に悶死すとせば、其の惨状と損害とは如何に大なるべきぞ。而して此の惨害を小にする第一の手段は他なし。衛生設備を完全にするにあり。然りと雖とも、軍隊衛生諸機関の整備せりと称する邦国にありても、国家の設備には程度あり。而かるに傷病者の数は無限にして、一朝大戦闘に遭遇し、多数の傷病者続出するときは、到底遺憾なきを期する克はず。況んや其の他の邦国に於ておや。民間特志救護協会即赤十字の起れる所以、実に茲に存す。

諸君の団隊は国際的盟約上に立てる赤十字団隊、即ち貴国の所謂紅十字団隊にあらずと雖も其の趣旨に於ては同一にして、人類相愛の至情に出で、戦争の惨害を軽減せんとする仁愛の精神に基けり。是れ余の此の拳を好みする所以にして、講演者が勤務時間の外に於てまで、特に諸君の為に尽力精励せらるるも、亦此意に外かならざるなり。戦闘当局者は各自邦家の為め身命を犠牲に供するものにして、其の敵と呼び味方と称するも、個人にありては相互怨恨あるにあらず。故に諸君は其戦闘力を失なひたるものに対しては、只た其創傷と疾病とを見るべく、決して北軍たると南軍たるとを意中に置くべからず。

我三輪博士の舅君たる高松凌雲氏は今を距る四十四年前即明治維新の際、幕軍の主将の依託によりて、函館病院を設け、交戦中自軍の負傷者を治療せるのみならず、敵軍の負傷者をも収容して、敵味方の差別なく、治療を加へたり。当時殺気正に熾にして、敵と見れば必らず惨殺せんとするもの多かりしも、氏は博愛の主義を説き、敵軍の唱ふる所は王政維新に在り。負傷して戦闘力なきものに対し、妄に殺傷を加ふべからず。恩讐により、其の措置を異にすべからずとて、彼我平等に心を尽して治療したる患者数は、傷者三百八十人（内死亡九十七人）、病者九百五十八人（内死亡者三十四人）、合計千三百三十八人なりしと云ふ。之れ武士道の精華にして、今日に至る迄も人口に膾々たる所なりとす。

若し夫れ諸君が感情上其の行動或る一方に偏倚せん乎。啻に余輩の賛助せる趣旨に背反するのみならず、諸君が本来の意志たる一視同仁主義を没却し、且江湖の同情を失墜するに至るべし。豈に注意せざる可なんや。

又新紙の伝ふる所に拠れば、諸君が団隊の名称に赤十字を冠するが如し。若し果して事実なりとせば、諸君は此赤十字なる文字の使用に関し、研究を遂げられしや否や。若し諸君の団隊が赤十字条約の保護を受くる資格に欠くる所ありとせば、縦とへ其の趣旨は同一なりとするも、之れに冠するに赤十字の名称を以てするは穩当ならざるが如しと思量す。此点に就ては、克く当事者の意見を問ひ、決行せらるべし。

凡そ何事に拘らず、其所思を貫徹せんとするには、身体強健ならざる可からず。若し身体孱弱ならん歟。其の志美にして其挙壮なるも、実行之れに伴随する克はざるを如何せん。故に克く身体に健康に留意し、人道の爲め艱苦を凌ぎ、欠乏に耐へ、而して仁愛博愛の旨趣を發揚せんことを希望す。

校長其の他諸教授の熱心と精励とに依り、大体の聴講も終り、明治四十四年十一月、愈々出發せんとするに際して、其の顧問医長としては、数多の候補者中志望の順序に依り、本校三十五年度卒業生鈴木寿賀治氏其撰に当り、茲に準備完く成り、同月九日を期して、勇躍故国の急に趣くこととなれり。同日午後一時本校運動場に於て、会場を設け、本邦学生は医科四年三年二年一年薬科の順序にU字形に列を作り、一行を待てば、予て控居たる留学生一団は、号令勇ましくも入場して、是に告別の式とはなれり。

順序

- 一、送別辞 学生総代 武井磯太郎氏
- 一、団旗の贈呈 総代として四年級委員
- 一、留学生答辞 留学生総代 吳重良

式終れば、時正に二時。万歳の声は高く、猪台の木精に渡り、髪梳る秋風も転々易水の昔思はしむるの感なくんばあらず。之れより、本校職員学生五百余人は停車場に送り、万歳声裡に勇ましく東上せり。車窓に翻る留日医薬学界中華紅十字団旗は、偶々夕陽を受けて十字紀章愈々紅ひに翻々として活躍の氣、自から満てり。当日出発者、左の如し。

[引用者註一姓名の誤記は[]で正した。]

李定、吳亜良、李恒昌[垣昌]、金子直、何煥奎、朱具輝[其輝]、徐寅、[田]龍瑞、思和[恩和]、吳詳鳳[祥鳳]、謝瑜、劉之綱、毛授泉、鄧以蟄、許普及、朱巾[朱芾]、陸繞陽、蕭登、李潤鼎、陳佩完、趙録敏、崖[崔]雲史、李希賢、李天鍋[天錫]、張邁郡、何浩然、黃黃崖、文燦[黃璜、崔文燦]、鄧純姚[純棣]、石君俠、陳振声[宏声]、姚夢慮、馮元亮、以上。

其の他、陳仁良、梁姚、正一[陳任樑、姚正一]、余繼敏、丁求真等は、準備の爲め、先発として、已に東京に在りき。聞く所によれば、其の後公使館との交渉を纏め、種々なる機械の整頓に数日を費し、同月十九日邦船博愛丸に投して、横浜を解纜して、瘴煙咽ぶ母国の地に向えり。南清原頭に翻る彼紅十字団旗の下、慈仁の風に浴する病傷者の心中果して如何。行けよ、善隣健児！ 壮なる哉！

【補足史料3】「長沙来柬」(『同仁』1912年3月号)

○千葉医専OB・黄孟祥と日本人医師、紅十字隊との連携（黄孟祥書簡）

謹啓。余寒未だ不退候処、恩師閣下は如何御起居被為遊候哉、奉伺候。迂生御地留学中は御懇篤の御教育を蒙り、而已ならず望外の御懇情を辱ふし、奉深謝候。

昨年秋卒業帰国するや、時恰かも革命事変に際会し、敝国数百年の惰眠を喚起し、共和政体の本領を発揮するも近き将来と、国民挙て奮闘罷在候折柄、遽かに戦時医術の必要に迫り候得共、未だ敝省に於て、外国医校卒業として迂生の外一人も無之事とて、各方面に重用被致、軍務医務科々長兼衛戍病院院長、野戦病院組織及び医科大学算備員等殆ど寧日なく、為めに帰国以来未だ一遍の御音信も不致、失礼の段、平に御海恕の程奉願候。斯く乍不及も、活動出来候は、之れ皆恩師御薫陶の御顧庇と、乍蔭感謝に不堪候。

尚、衛戍病院組織及傷兵治療上に於ては、貴国同仁会医全徳氏の熱心なる援助を受け、好成绩を得、貴国医術の信用を博し申候。又今日医科大学算備員と相成り候上は、範を貴国に取り、此際東洋医学の普及を謀り、平素の持論を実行致度決心に候得共、浅学無経験の迂生に有之候間、何卒将来一臂の御援助を蒙り度、奉懇願候。

就いては、公務御繁多の折柄、誠に恐縮の至りに候得共、医科大学及専門医校組織に関する規程及校則及内務省医事制度案、陸軍省軍医局規則、衛生局規則等御取調べ、御送付を願ひ候へば、幸甚不過之候。先は御不音御託旁、右御報迄。

黄孟祥 頓首敬呈

追而

今回愚妻渡華致す事に取極め候に就ては、種々参考に供し度候間、先生の御配慮を得て、医科大学及病院内其他衛戍病院の参観を願はれ候へば、誠に好都合に御座候間、可然御配慮奉願候。

黃帝紀元四千六百零九年一月二十五日

(引用者註一宛先が千葉医専教員か同仁会関係者かは、不明)

【補足史料4】『校友会雑誌』第56号、1912年4月号、千葉医学専門学校校友会発行

○中華民国紅十字会顧問医 鈴木寿賀治氏(三十六年度卒業生)よりの書簡 (p175～176)

謹啓。久敷御無沙汰に打ち過ぎ、申訳之れなく候。

去る五日上海に於ける中華民国紅十字会本部より来電。事局解決の故を以て、全部解散の報に接し、全員上海に向け帰られ候。其際小生は、蕭登・谷鐘崎両氏と共に或る地の所要の爲め、当地に参り、目下両湖慈善救済会総裁李君の邸に寄寓罷在候。

当地着の節、兼ねて隊員李定氏より御願申上げ候薬品全部落手。並に御尊玉拝見仕候。御慈愛に甘え、毎々御無理のみ御願申訳無之候。当地は霖雨霏々として、誠に鬱陶敷限に御座候。幸に心神共に益々強健に御座候間、乍他事御安心下され度候。

別段申上ぐる程の事も無之候。何れ近々帰国の途に就く考に御座候へば、其際為趨拝顔の栄を可得候。

乍末筆御全家様は申すに不及、諸恩師並に病院学校内諸君に宜敷御伝声下され度候。

三月十日

在長州 [湖南省長沙]

鈴木寿賀治

荻生校長殿

【補足史料5】『校友会雑誌』第56号、1912年4月号、千葉医学専門学校校友会発行

○中華民国紅十字会員 蕭氏(本校在学生)よりの書簡 (p176)

校長夫子大人函丈

手諭頒来敬悉一切。李定君所定。薬品薬店島久会社送状亦于本週寄来。不日当可抵湖南也。刻下和局告成。戦争惨禍。從此永息。学生等希望和平。勝于生命。始願既達。即擬束装来東再沐教誨。因湖南紳士以慈善事紫相督責。不得已稍留此地、代為經營。(鈴木先生及谷鐘崎君) 俟組織稍有頭渚。即当趨謁門牆也。余詳鈴木先生酋。不另贅。即清道安。

三月十日

学生 蕭登上

各先生及各学友处。均此致意。(中華民国湖南育嬰街両湖慈善救済会)

[和訳]

校長先生様

李定君が依頼した薬品と、薬店島久会社の送り状と共に、今週着きました。まもなく湖南に着くでしょう。現在は和の局面が完成を告げ、戦争の惨禍は永久に止むでしょう。学生たちは、生命より和平を希望しています。最初の願望はすでに達成し、すぐ荷物をまとめ、日本に戻り、先生の教えに浴したいが、湖南紳士が慈善事業をもって相督責するため、やむを得ず、この地にしばらく留まり、代わりに経営をします。(鈴木先生および谷君、鐘崎君) 組織が整うことを待つてから直ちに先生にご挨拶に上がります。ほか詳しくは鈴木先生の手紙に譲ります。お元気で。

【補足史料6】『校友会雑誌』第 56 号、1912 年 4 月号、千葉医学専門学校校友会発行

○南京陸軍軍医院長一等軍医長 王混芳(四十四年度卒業生)よりの書簡（p175）

拝啓

時下益々御清穆の御事と奉大賀候。さて在葉中は一方ならぬ御配慮を蒙り、千万忝なく奉深謝候。小生不在中の華簡は帰京早々拝見仕候。閣下より御深厚なる御教示に預り候事は、陸軍部総長、黄閣下にも伝言致し候処、深く感謝致居候。就而は、お手紙なりと、申筈に候へども目下政務多端を極め居り候へば、乍失敬小生より、可然御礼申し上げくれとの事に御座候。（中略）日々の患者は新旧とも約五百有余にて、誠に多忙を極め居り候。（中略）小生の去就に付ても、深く考へ居り候へども、何分一段落附かざる内は存じ、一生懸命活動罷在候。（中略）

各先生に対しては何んとか御礼の印迄に御送付申し渡きものと考案中に御座候間、何れなり御送付可申上と存じ居り候。先は右まで如此御座候。忽々頓首。

三月十六日

王混芳

恩師荻生博士閣下

【補足史料7】『校友会雑誌』第 58 号、1912 年 12 月号、千葉医学専門学校校友会発行

○中華民国留学生建碑記事（p35）

昨明治四十四年支那武昌に革命軍起るや、傷病者は甚だ多数に上り、而も衛生設備の不完全なるも結果は、惨状睹るに忍びざるものあり。於是か在本邦留学生諸氏、檄を全国の留学生間に飛ばし、本校在学の留学生主団となって紅十字団を組織し、急遽帰国して、官軍両軍の救護に赴きたる次第は、前号已に報道せるが如し。当時其出発に当りて、本校に於ては校長始め、各教授講師は此挙に同情し、臨時講習会を開き、救急療法及調剤等の速成講筵を開きたる事等ありしが、革命の砲火も一旦鎮平し、本年九月紅十字団も目的を了して、再び千葉へ帰校するに至りたれば、留学生一同は深く校長以下職員の後援と本邦学生の同情を感謝せん為めに、学校庭前に美事なる記念石碑を建設し、昨秋出発せしといふ十一月九日を選びて、同校長並に各職員と共に記念撮影などを試みたりといふ。

【補足史料8】玄鼻キャンパスに立つ碑文(『千葉大学医学部百周年記念誌』口絵、註4の諸文献)

〔原文〕

辛亥秋中華民國革命事起武漢南北軍戦争甚烈同学恐戦禍蔓延而傷亡之数多也乃集同志起紅十字隊連合留日医藥学生全体返国以図極救時本校校長及列先生深韙斯議凡關於救傷看護法悉心指導各学友復釀貲購藥為贈臨岐毀毀益資策励同人返国分駐於湘漢江淮間傷兵頗利賴之六閱月戦局告終蔵事返校雖無善可紀而列先生及諸学友盛意弗可泯也爰種樹之碑以為記念其辞曰

王綱解紐 共和初建 国歩艱難 兵戒数見 伏屍塞川 碧血青野 哀此生民 誰大護者
壯三軍氣 紅十字旗

生死肉骨 極難扶危 維列先生 亦越諸友 作則大同 濟世仁寿 人道張皇 德意滂沛
木石萬年 永垂勿替

中華民國留学千葉医学専門学校学生同建

中華民國元年十一月九日

日本大正元年十一月九日

〔和訳〕

辛亥（一九一一年）秋、中華民國に革命が起こり、武漢での南北軍の戦争は、甚だ烈しくなってきた。留学生は、戦禍の蔓延にともなう、負傷したり死亡する者が多くなってきたので、同志を集めて赤十字隊を組織した。留日の医学薬学の学生を連合して、祖国に帰り、救援に赴いた。学校校長および諸先生方は、この挙を高く評価して、負傷の治療看護に関して、懇切に指導して下さった。また、学友は資金を醸出して、医薬品を購入し寄贈してくれ、出発に際しては資金計画を拡大して励ましてくれた。留学生一行は、祖国に帰り、湘・漢・江・淮の各地に分駐して、負傷兵の大きな頼りとなった。六ヶ月が経って、戦局は終りを告げたので、母校に帰ってきた。善事の記すべきものは無いが、諸先生および諸学友の行為を忘れないように、ここに樹を植え、碑を建てて記念とします。

その辞に曰わく。

王綱紐を解きてより（清朝宣統帝の退位）、共和を初めて打ち建てたが、国の歩みは艱難で、戦争は絶えず、伏屍は川を塞ぎ、山野を血ぬらせている。この人民の悲しみは、誰が護るのであろうか。三軍を励ますのは赤十字の旗、生死肉骨の難を救い、危うきを助ける。諸先生方も学友たちも、極めて公平で平和な世の中を願っている。世の中に仁寿を致し、人道を広め、徳意が盛んである。樹を植え、碑を建てて、万年永く讃える。

中華民國留学千葉医学専門学校学生同建

中華民國元年十一月九日

日本大正元年十一月九日

【補足史料9】『校友会雑誌』第 58 号、1912 年 12 月号、千葉医学専門学校校友会発行

○支那語研究会起る（p35）

水や空、空や水なる海の如き琵琶湖は広し。雲の天井突き破れる富士は高し。此等を有する日本は尚広し。然も空に飛行機の飛行する時、吾人の活動の範囲は之にては、しかく余りに小なり。杏林に覇をなすもの、豈二十の患者を争うて、弾丸黒子の地に汲々せんや。眼を一転せば、隣邦支那の地は広袤、実に廿七万方里、人口実に四億、近時漸く古の草根木皮に甘ぜず。切りに眼を刮いて、日進の医術を求めんとしつつあり。密が疎に移動するは、物理の原則なり。況や、医は仁術なり。同族東洋人を救済するは、豈吾人の天職に非ずや。眇たる小天地、吾人が翼を伸すに足らず。行け、関山の峰、遼河の辺とは、口をついて出る語にあらずや。

この必要に迫られて、ここに支那語研究会起りぬ。初め中華民国留学生諸氏が、一年前母国の急を救はんとして、紅十字軍を組織して、帰省せられし日を記念せんとして、大正元年十一月九日本校構内に記念碑を建て、夫の除幕式に際し、校長荻生博士は、「日支関係今日の如き日に当り、殊に多数の留学生を有する本校に於て、支那語研究を始むるは大に時期に適せるに非ずや」と語られき。此席に在りし医科三、四年級委員、大に鑑る所あり。急に級全員にはかりし処、熱心なる多数の賛成者を得しを以て、講師には留学生諸氏の好意を以て、これに囑託することとし、支那語研究会は成立しぬ。大正元年十一月二十七日午後一時第二教室に於て、千葉医学専門学校支那語研究会発会式を挙げぬ。先づ森幹事起つて、会の由来、目的、希望、抱負、留学生諸氏への感謝等を述べ、卒業生武井磯太郎よりの祝電を朗読し、次て荻生会長起つて、大要左の如き演説をせられぬ。

「日露戦争の当時、予は独逸に有りき。或時一小旅行をなせり。其汽車中にて、一貴婦人と語れり。彼の婦人は日本人の武勇を称へ、最後に吾人は戦勝国民が何故に Gelbe Haut [引用者注記一黄色い肌]を有するかを疑ふものなりと語れり。予は徒らに黄人を撲き白人を謳歌するものに非ず。東洋は黄色人種の天地にして、東洋のことは東洋にて処理し、敢て白人を煩すを要せず。吾等黄色人種は相提携して進むべきなり。隣邦支那は先頃大革命を経て、刻々開明に進みつつありと雖も、彼等が完全なる日進の医学の恩恵の浴するは遠き将来のことに属す。故に心ある士は、立って善隣の為に尽し、人道の為に当に努む可きことなりとす。此時に当りて支那語研究会の生れたるは実に慶賀の至りに堪へず。益会の発展を期す」と。

最後に呉君、留学生講師諸氏を代表して、簡単なる挨拶ありて、茲に閉会せり。

因に当分呉君は会話、単語、陳君は読本を受持たることとなれり。